平成３０年度（2018 年度）

第６４回指導者会議

報告書

2019 年（平成 31 年）3 月

公益社団法人日本学生陸上競技連合

目　次　　頁

Ⅰ．はじめに、開会挨拶、提案趣旨…… 3

Ⅱ．第１部　個人選手権大会のあり方を考える－検証と課題－ …… 4
1．演者らの紹介、本会議のねらいと進め方
2．個人選手権のコンセプトや特色など
3．記録上の成果
4．強化委員や選手のアンケート結果
5．地区学連幹事の声
6．平塚開催の検証
7．質問や意見

Ⅲ．第２部　個人選手権大会のあり方を考える
－アジアパーミット大会開催の可能性と展望－ …… 8
1．ＩＡＡＦランキング制度との関連
2．海外選手の招待
3．海外選手のオープン
4．大会のグレード・アップ
5．大会運営のレベル・アップ
6．個人選手権の開催時期

Ⅳ．まとめにかえて、閉会挨拶 ……１３

Ⅴ．資料編 ……１５
資料１　しおり（テーマ、趣旨、プログラム、演者ら）
資料２　本テーマの枠組み（イメージ図）と検証の視点
資料３　第１部・第２部の経緯と構成内容
資料４　個人選手権大会の歩み（29 年間の概要など）
資料５　大会名の変遷理由と学生幹事らの諸活動（資料４の補足）
資料６　参加標準記録 2018―個人選手権と日本インカレ―
資料７　競技成績 2018―個人選手権と日本インカレ―
資料８　強化委員のアンケート結果（８名：まとめ）
資料９　個人選手権優勝者のアンケート（28 名：まとめ）
資料 10　平成 30 年度第 64 回指導者会議の開催要項
資料 11　平成３０年度指導者会議運営委員会
資料 12　平成 30 年度指導者運営委員会の開催報告
資料 13　演者らの委員会等での意見・助言など

平成３０年度　第６４回指導者会議

報告書（要旨）

個人選手権大会のあり方を考える－検証と課題－

公益社団法人 日本学生陸上競技連合

Ⅰ．はじめに、開会挨拶、提案趣旨

＜はじめに＞

平成30年度第64回指導者会議は2019年（平成31年）3月９日（土）に中央大学駿河台記念館（670号室）で開催された。テーマは「個人選手権大会のあり方を考える－検証と課題－」であった。

日本学生陸上競技連合では、日本陸上競技界の発展のために毎年「指導者会議」の名の下、シンポジウムや講演などを通じて競技者の強化に関するさまざまな課題について考えてきた。

過去４回の指導者会議は、「日本学生陸上フォーラム」や「ユニバーシアード強化研究会」のテーマで討論が行われ、多くの成果を挙げてきた。

今回は上記会議の成果等も参考としながら、日本学連が主催する個人選手権大会に焦点を当てた。会議の目的は、今後の個人選手権大会のあり方を考えるために中長期的視点に立ったアジアパーミット大会の開催も視野に入れ、現状の検証を行って今後の課題を明らかにすることにあった。各演者には検証の視点（注１）と資料（注２）を参考にして発言してもらった。また進行についてはフロア（指導者や学生幹事ら）も含めて活発な意見交換の場になるよう努めた。

注１）検証の視点：個人選手権の特徴、個人選手権の競技運営2018

注２）参考資料：個人選手権の歩み、日本ＩＣと個人選手権の関係、ＩＡＡＦランキング制度、アジアパーミット大会等

＜開会挨拶＞　　（以下：敬称略）

司会　第64回指導者会議を始めさせていただきます。司会を務めさせていただきます障子です。はじめに日本学生陸上競技連合の松本会長よりご挨拶をいただきます。

松本　今日の指導者会議の意義はすばらしいと思います。長年企業の経営などいろんな仕事をしてきて、こういう会議や研修会について思うことがあります。キーワードは３つです。

一つは組織の力。会社の体力と言い変えてもいいと思いますが、経済環境や役員構成の変化で毎年違う。特に学連の場合は学生が毎年変わっていくので、毎年組織の力のレベルが違うと思う。これをいかに保ってより強くして継承していくかが大事であると実感している。従って組織の力を高める、維持するという意味でも指導者会議は大変大事と思う。

二つ目のキーワードは人の成長。人は何歳になってもある時突然成長する。陸上競技でも記録が突然ある時に伸びることがある。年をとったら伸びないと思うかもしれないが、その人を研修に出していろんな人と接点を持たせ、違うジャンルの人の話を聞くことにより目が開かれる。そして自分も一回やってみようと思うと、それを一つのきっかけとして大きく成長する例を私は何件も何回も見ている。従ってどういう機会を与えてあげるかが大事である。この会議はそういう機会になるよう毎年願っている。

三つ目のキーワードは変化。人はだいたい安定を好む。昨日のように今日がある、今日のように明日があればいい。自分の乗っている船が沈もうとしていてもその船の真ん中に、座っていたい、沈まないだろう考えて安心している。しかし変化は常に起こっている。しかも変化を自分なりにどう捉えるかによって、一つのことはピンチがチャンスになり、チャンスが希望になるというように変化していく。一方、変化にはリスクも伴う。しかし、それをきちっととらえて次の展開を見渡し、見渡したら行動する、と考えれば事態は良いほうに展開していくと思う。

ぜひこの指導者会議が意義あるものとして次への発展に結びつくように、そして学生や全国から来ているいろいろな人の成長に結び強くように願っています。冒頭の挨拶にさせていただきます。

＜提案趣旨＞

司会　阿保委員長に提案趣旨をお願いします。

阿保　はじめに神尾副会長、栗山委員長、関根委員長、宮崎学生幹事長、二見副幹事長にお礼を申し上げる。先生らと委員会や競技大会等で意見交換を行った。基本的方向性を検討してテーマや目的などを明らかにした。そして本日の配付資料（全体で23頁）が作成された。

キーワードは日本インカレ、個人選手権、アジアパーミットの３つ。日本陸連がアジアパーミット大会の説明会を７月12日に開いたので日本学連から３名が出席した。本指導者会議でアジアパーミット大会が日本学連のどの大会に結びつけられるかどうかを考えてみることになった。

配付資料の説明を簡単に行った。要約すると次の通り（詳細については資料編を参照のこと）。

資料１　テーマ、趣旨、プログラム、演者ら
資料２　本テーマの枠組みと検証の視点
資料３　２部構成の経緯と７項目
資料４　個人選手権の歩み（29年間の概要等）
資料５　大会名の変遷理由と学生幹事らの活動
資料６　参加標準記録とリザルト―個人選手権と日本インカレ―
資料７　強化委員のアンケート結果（まとめ）
資料８　優勝者のアンケート結果（まとめ）

昨日の学生幹部研修会で上記資料の説明を50分行ったので学生は十分理解されていると思う。あとでご質問やご意見をお願いする。

Ⅱ.　第１部　個人選手権大会のあり方を考える－検証と課題－

演者　（順不同）
宮崎芽衣 氏（日本女子体育大学、学生幹事長）
二見百香 氏（日本体育大学、学生副幹事長）
栗山佳也 氏（大阪体育大学、学生連合：常務理事・強化委員長）
関根春幸 氏（東京都立世田谷総合高等学校、学生連合：常務理事・競技委員長）
コーディネーター　船原 勝英 氏（共同通信社、学生連合：指導者会議運営委員）
司 会　障子 恵 氏（跡見学園女子大学、学生連合：理事・総務委員長・指導者会議運営委員）

第１部は、「個人選手権大会のあり方を考える－検証と課題－」のテーマであった。具体的には、個人選手権のコンセプトや特色、記録上の成果を確認し、強化委員や選手のアンケート結果を紹介。地区学連幹事の声を拾い、平塚開催の検証なども行った。また会場との質疑応答もあった。その模様を一部要約して報告する。

１．演者らの紹介、本会議のねらいと進め方

司会　今年度のテーマは「個人選手権大会のあり方を考える、検証と課題」です。個人選手権としては11回目の開催でした。桐生選手（2016）や多田選手（2017）が好記録を出したのは皆様の記憶にあると思う。台湾をはじめ外国選手が優勝や入賞している種目も出て来ました。今日はこの大会をどう展開するかを考えていきたい。（注：質問用紙の配布や回収時期、フロアの質問等のタイミングについての説明があった）

上記演者らの紹介を順次行った。

船原　個人選手権は皆さんにも大変なじみのある大会と思う。第１部で大会自体を振り返って検証したい。それを基に第２部はアジアパーミット大会への可能性を探る。現状の問題点などもここで論議をしたい。きちんとした結論を導けるかは分からないが、考える上でのたたき台を提供したい。

個人選手権はインカレと比較して自由度が非常に高いというか、変化させる可能性を持つ大会だと思うので、皆さんのアイデアや学生幹事さんたちの工夫によってより意義のある大会になっていくと思う。活発な意見をお願いします。はじめに個人選手権の歩みを二見さんから。

２．個人選手権のコンセプトや特色など

二見　資料４をご覧ください。個人選手権は1990年から始まっており、大会名は日本学生種目別選手権とされていた。開催時期は９月から始まっていて、現在は６月ごろに開催されている。個人選手権のコンセプトは「個人と個人の勝負」「自己記録への挑戦」です。大会の特色としては、現在台湾、香港、シンガポールの選手が出場（エントリー）していてグローバルな大会となっています。

船原　大会運営を実際に運営していて、何か他の大会と違っていることはありますか。

二見　平塚競技場の方がすごくよくしていただいたので運営がスムーズに進んでいる。ありがたいです。

船原　個人選手権はインカレと違って開催地が固定されている。平塚市から非常に支えていただいていると聞いている。アンケートの中でも固定されているのはいいことだという意見が多い。ただサブトラックがないという声はどうしてもある。

３．記録上の成果

船原　日本選手が国内で９秒台を出したのは学生の大会しかいない。そういう意味では非常にインパクトのある大会だと思う。その辺りの記録的成果などについて栗山委員長から紹介していただきたい。

栗山　記録的な成果ということで私の立場から検討した、思いつくところを述べると、７頁（資料２）の大会の変遷。名称も変わったが、2019年で30回を迎えるが、平塚競技場で開催された頻度が多い。何が平塚を有利にしたのか。成果のプラス面とマイナス面の両面を考えてみた。

まずプラスについて。１つ目としては短距離種目の100m，200m、跳躍など直線の種目。追風で試合ができるのは通常の競技場と違う。したがって多田選手が、追風4.5mであったが、9秒94を出した。これには本当に競技場全体がどよめいたのを覚えている。臨機応変に競技の場が追風に変えられる。２つ目としては参加標準記録がインカレＢよりやや低めに設定されている。インカレは最大３名枠しか出られないが、個人選手権は突破していれば４名、５名と数多く出られる。それで盛り上がりを見せる。３つ目としてはユニバーシアード大会の最終選考会として位置づけた大会が４回あった。７頁の通し番号の８回目のシシリー、10回目、22回目、そして最近では28回目の台北。個人選手権を選考会として位置づけるのは対校戦にはない個人として戦う意識となる。

しかしながら、マイナス面について。１つ目としては地区インカレから１～２週間で開催されることから選手のモチベーションが長く続かないのでは。６月の開催時期が果たして良いのかどうか。２つ目としては教育系大学では５月下旬から教育実習がある。教員免許を取得するには実習に行くのは当然だが、教育実習期間中でしかもインカレ直後だと、４年生は非常にしんどい時期である。狙った試合に出てもなかなか成果を出すことが難しいと考える。３つ目としては時期的に梅雨も近づくということで高温多湿である。特に長距離種目では非常に厳しい時期に入ってくる。短距離や跳躍などフィールド種目では影響ないかもしれないが長距離は厳しい。駅伝の各地区予選会とも重なって厳しい。

７頁の評価の欄を見ると、学生記録として３種目が誕生した。男子円盤投、男子棒高跳、男子100m。ジュニア日本新として女子ハンマー投。新記録としては少ないかもしれないが、この大会の現状と思う。

４．強化委員や選手のアンケート結果

船原　記録については、資料６－１頁にインカレと個人選手権の参加標準記録、資料６－２に両者の上位成績が表になっている。

強化委員のスタッフ（資料７）と選手（資料８）にアンケート調査を実施した。その内容をかいつまんで紹介する。

地区インカレ後、大会が少ない時期に他地区と戦えるメリット、標準記録を突破すれば何人でも出られる。一方懸念部分では開催時期が６月でいいのか。海外選手が招待されることによって日本選手の順位が下がる。大学によっては優勝の評価を重んじるところもある。本来は優勝なのに２位か３位になってしまう。いわば本音と言う声が出ていた。

選手の声としては、大会は良い記録が出て、い

い雰囲気でやれるのだが、大会の知名度が低い。もっとアピールしてほしいという意見もあった。地方の選手にとっては全国の選手と競える機会という声もあった。日本選手権が近いので予行演習になる。インカレと違って、プレッシャーも少ないので、思い切って記録を狙えるという声もあった。特に長距離にとっては、タイムに応じた数組でレースが行われるので、実力に応じて記録を狙いやすいという声もあった。海外選手については実際に競った９人の選手のうち５人が今後も海外選手と競いたい。いいえが１人。理由は分からないが。概ね競いたいであった。今回海外選手と競えなかった18名の中に今後競いたい人は12人いた。自分も競いたかったという人が多かったことが分かる。ポイントランキングについても今後そういう大会ができれば、という声が指導者、選手とも多かった。

５．地区学連幹事の声

船原　地区学連の方から実際の生の声を聞きたい。個人選手権について、どういう考え方をもっているか、どういう位置づけをしているか、どういう取り組みをしているかなど。ぜひ声を上げてほしい。

坂入（東海学連）　選手のアンケートにもあったが、個人選手権に照準を合わせている選手があまりいないという印象である。去年は特に翌週に日本選手権、２週後に西日本インカレがあって、そこに合わせている選手が多いという印象を受けた。全体として、全国の高いレベルの選手と競える大会としては価値があると考えている。

三田村（関西学連）　東海学連の意見への付足しですが、関西は６月に全日本大学駅伝の予選会も行っている。個人選手権、予選会、西日本インカレと毎週のように大事な大会があって、選手によって合わせる大会が違うのが課題となっていると感じる。

船原　実際６月という開催時期はどうか。もしくはこの時期にやってもらえれば、ということはあるか。他の地区の方はどうですか。

三田村（関西学連）　地区で実施するトラック・アンド・フィールドの大会はこの時期は少ない。天候を考えてもこの６月という時期はいいのかなと思う。

伊藤（北信越学連）　北信越としては競技力の高い選手があまりいないので、出ている選手も多くない。個人的な意見としては、対校戦より個人の力のぶつかりあいなので、目玉となる選手がいないと大会自体の盛り上がりに欠けると思う。対校戦だと力が多少下がっても学校単位の応援があるので、大会の盛り上がりがある。多田選手のような目玉の選手がいないと大会の魅力が下がってしまうのではないか。

船原　鋭い指摘ですね。桐生、多田がいないと注目度が下がるのではと昨年から言われたが、その通り。

山田（関東学連）　個人選手権は他の大会と違って海外選手が出ていることが特色。一昨年あたり走幅跳の選手が優勝していて、フィールド種目で海外選手と競うことはあまりない。日本のトップ選手が海外に出ていって戦うというイメージが強いと思うが、地方インカレで入賞を狙うような選手が海外選手と競う、そういう門戸を開くというのが個人選手権の特色であると思うので、そういう独自路線で行った方がいいと思う。

船原　今年も海外選手を招待することが今日の理事会でも出たと聞いている。まさに特色になるといいと思う。

６．平塚開催の検証

船原　念のために大会を検証してみたい。その上で平塚開催については運営上も含めてどういう問題点やメリットがあるのか。総合的に関根委員長に補足をしていただければ。

関根　競技委員会はいろんな面から競技会を見直している。１）平塚競技場で競技会を開催するのはどうなのか。理想をいうともう少し東京から近くていいのではと思う。それを補うものが平塚にあるので続いているのだろう。２）きちんとウォーミングアップをして競技に出られるようなウォーミングアップ施設が必要だろう。専務理事らを通して平塚市にサブトラックを要望しているが、造る・造るといいながらなかなか造ってくれないという状況。400ｍトラックでなくても選手がウォーミングアップができて競技に出られる環境を整えてほしいという要望をしているが、そういうものができて施設面でも充実しているともっと記録が出る大会に近づいていくのかなと思う。３）平塚市の魅力について。大型映像が入ってから平塚市のリードで地元のケーブルテレビ会社を巻き込んで、どうやって撮れば競技が見られるかというところから始まって大型映像での放映が始まっ

た。今ではケーブルテレビの会社の方も慣れてきて、ここからこう撮りましょうとか、フィールドをもっと撮らなきゃいけませんねとか、もっとスイッチングをもっと上手くやらねば、などと言って、選手の一人一人のパフォーマンスをきちんと大型映像の中に映すという努力もしている。４）一番の魅力として。競技会のコンセプトとしては個人の記録への挑戦。短距離種目はすべて追風で競技をするようにしている。国内では追風参考と言われて公認記録と違う扱いをされているが、ランンキング制度の中では違った扱いになってきている。そういうことから、選手が追風も利用する、競技場も利用する、大会も利用する、競技日程も利用して自分の最高のパフォーマンスを平塚で発揮できるような大会にこれからもしていくよう努力している。５）会場に平塚／東海大学と書いているがハンマー投をやらせてもらえない。サッカーの関係でハンマーを芝生にバンバン投げるのは“ちょっと”と言われていて、そこも改善したいが、インカレも含め非常に苦戦をしている。

いろんなところから皆さんのお知恵をいただいて、選手一人一人がこの大会を目指して、自分の最高のパフォーマンスを出そうというところで我々が協力できることは何なのかを真摯に考えて一つづつ実現できるような大会を育てていきたい。

船原　非常に可能性を秘めた大会なんだと、改めてランキング制度などを考えた時には、この大会が我々の手でより意義のある大会に変えていけると感じる。実務的なこともあるので大西事務局長から補足していただくことがあれば。

大西　今のテーマでは特に。

船原　始まってから30分程度が経過。大会の検証はだいたいできたのではないかと思う。（質問用紙を書いていただいた方から回収開始）

三条　第１部のテーマに関連して。その当時どうやって活性化するかを考えて名称の変更があった。活性化できない課題があったことは事実。北信越学連の学生が言ったが、日本インカレには、ケガでもしてない限り、参加資格を持っている選手はほとんど出る。個人選手権は自由度も高いが個人にそこが委ねられていてオールスターキャストになりにくい。昨年、個人選手権の振り返りで書いたが、次の週に日本選手権があって、より高い大会を狙うのは当然だと思うが、日本選手権より学生ナンバーワンになる方が高いというモチベーションがあまりないのかなと思う。日本インカレが一番高いと考えている学生も多い。変化し得る可能性はあると思うので、出たい大会にするということに行きつくと思う。

船原　非常に重要な指摘をしていただいた。名称変更も活性化して価値を高めていこうということだと思う。それで平塚開催で今の形に落ち着いていると思う。ＩＡＡＦランキング制度とか、海外との交流もあって別の価値も生まれている。それも踏まえてごく近い将来、もっと魅力的な大会に変えていく努力をしていくべきでは、と改めて感じた。

７．質問や意見

質問１（長谷川・東北学連）　新国立競技場ができたら場所を変える可能性はありますか。このあたりはどうでしょうか、大西さん。

大西　平塚でも地方でも長い歴史の中でお世話になったのを振り返ると、平塚市とは特別な関係がずっとあったと思う。平塚というのは河野さんの日本の陸上界に対する貢献が高く、学生陸上界がその中心で、平塚とは太いパイプが今でもつながっていると思う。新国立になると経費が問題になってくると思う。当然、新国立でやろうと皆さんでそういう話になればまた別だが、新国立を目指すというのは今後の課題であると思う。

船原　他に質問があれば受け付けますが。

意見１（神尾）　皆さんが質問を考える間に話をさせてください。個人選手権になる前の種目別選手権から始まっているが、その時は日本インカレに出られない人たちの場を作ろうというのが最初だと聞いている。それから始まって、個人選手権という名前にする時に、前々会長に個人選手権ではなく選手権にしたいという話をしたら、それはオーバーでは、もっと個人を前面に出した方がいいということでこの名前で落ち着いたと記憶している。

平塚でやる、そこで精いっぱい競技をしてもらうとなったときに競技運営のあり方が色々検討された。阿保先生が競技委員長の時、当時ハードルの予選は一番初め（プログラムの１番目）に設定された。どうしても足りないウォームアップの時間をなんとかしようとしてアンケートも行ってタイムテーブルを作った。いろいろ工夫が必要な競技場だと言わざるを得ない。これからいい記録を出すためには何をすべきか。それが平塚なのか、その他なのかであっても、考え方の方向としては

必要でないか。
意見２（大西）　先ほどの回答に再度お答えします。財務的なことが中心かなと思う。１）平塚市が色々応援してくれており、競技場の使用料がゼロです。通常は100万円単位です。２）ケーブルテレビもある。当初は研修で教えてくださいというところから始まったが、ケーブルテレビに払っていない。平塚市のお世話によっていろいろのフォローをしてもらっている。通常は大型映像を使うと１日当たり数百万というところもあるが、平塚で経済的に大変お世話になっている。
船原　普通ではあり得ない協力をしていただいている。実学も合わせて平塚市に非常に大きな協力をしていただいているとは聞いている。普通では考えられない大会。多少ご不満はあるでしょうが、そこは十分理解していただければと思う。
　今後の展開によってはウォーミング・アップ・エリアが400ｍにこだわらなければ、そして運用に何か工夫が出来れば実際上は問題がないと思う。
質問２（吉村：国際委員長）　時期をずらす（３月または11月）ことが可能であるのか。
船原　加えて４月は可能なのかなどはあると思う。
質問３（吉村）　賞金レースや特別の名誉があるのか。
船原　今は出ていない。
質問４（吉村）　ＮＴＣを自由に使えるようにしたらどうか、ということ。
船原　赤羽ですか。
吉村　最高の記録が出れば名誉や特権が得られる。地方の人もそれを目指せる。３月や11月なら他の競技会がなく、その時期に可能ならばそういうチャンスがあってもいいかな、と。
三条　３月はまだ雪が降っている。
吉村　だから地方の人もそれを目指してやったら、なんとかトレーニングになるかもしれない。今までと全然違うことで、冬季練習を変えて３月を目指してという考え方でもいいかと思う。団体でなく個人で何か目指している場合です。
三条　趣旨は分かるが。
吉村　難しいと思うが。
船原　３月や11月は、はじめ「エッ！」と思いましたが。そのくらい発想を変えてみろということですよね。国立トレーニングセンターの利用は、表彰台に上がったら準日本代表と同じくらいの扱いにするということですよね。
吉村　今は自由に使えないです。優勝したら各種データについて年に1～２回測定したり、施設を使用したりというような、あまり考えられないことをあえて考えてみた。
船原　質問はこのくらいにして、第２部に移りたい。アジアパーミット大会の展望について。

Ⅲ.　第２部　個人選手権大会のあり方を考える
－アジアパーミット大会開催の可能性と展望－

第２部は、「個人選手権大会のあり方を考える－アジアパーミット大会開催の可能性と展望－」のテーマであった。具体的には、議論の前提となるＩＡＡＦランキング制度を紹介、海外選手の招待と出場区分などの扱いを論議した。大会のグレード・アップや運営のレベル向上と開催時期などにも話題が及んだ。また会場との質疑応答もあった。その模様を一部要約して報告する。

１．ＩＡＡＦランキング制度との関連

船原　これについてはＩＡＡＦのランキング制度との兼ね合いが抜きには語れない。多くの人が理解していないので関根委員長から仕組みを説明していただく（参照：資料３）。
関根　今後実施されるＩＡＡＦランキング制度。今までは大きな大会に出るには標準記録を決められた期間内に１回超えれば参加資格が得られた。今度はそうではなくなる。ランキングポイント、例えば100ｍだと決められたシーズン中に５回の出場が必要になる。それぞれのランキングポイン

トが算出されて個人のランキングが決まる。

ランキングが算出されるためのポイントは、１つは記録。もう１つは大会のステータスについている順位スコアがある。残念ながら日本で開催さえる学連の大会などは一番下のステータスになっていてあまり順位ポイントがつかない。

そこでアジアパーミット大会という話がでている。100ｍでいうと、メインを100ｍにしていても、決められた期間中に100ｍを５回走らないかもしれない。例えばシーズン初め、２月、３月だと海外では主に室内で競技会が行われるので、100ｍで世界大会にエントリーしたい人は、室内の50m、55m、60mの記録もポイントとして有効にしますよとなる。そのポイントが５大会必要になる。そのうちメインの100ｍは３大会必要。それ以外のサブの室内種目などは２大会まで認められる。当然ランキングポイントの高いところから５つ拾ってきます。もちろんオリンピックや世界陸上など一番上の大会で優勝すれば大きなポイントがつく。

もう一つ大きな違いは、追風でも向風でもかまわない。例えば100ｍで追風４ｍならランキングポイントから24点引く。向風なら24点追加しますとなる。今まで追風参考記録だから、いいやということではなくて、競技会で出た記録はすべて申請していただく。それによってランキングが決まり、出場できるかできないかがはっきりしてくる。またパフォーマンスがいつ行われたかも重要。古い記録は有効ではあるがポイントが引かれる。Ｔ＆Ｆだと約12カ月が有効で、それを過ぎるとポイントが引かれる。古くなるとなるほどポイントが下がってくる。10000m、混成などはもう少し長い（約18カ月有効）。

こうしたランンキングを基に世界に出て行く。大きな大会で数多く活躍することが必要になる。そういう大会に日本から送り出すには、大会のステータスを上げていくこと、何らかの形でいい記録が出る、平塚でいえば必ず追風で走らせてあげる。そういう競技会が数多く必要になると思う。

ランキング制度は非常に複雑なので、私の方でも研究して競技会運営に生かしたい。これからも勉強を続けたい。

船原　霧が晴れたようにポイント制度のイメージができたと思う。個人選手権において以前からやっている追風で行うというのは、ポイント制度の中でも非常に有効であることがわかる。向風でもいいが、記録が出ないので今後も追い風でやっていくと思われる。

２．海外選手の招待

船原　もう一つ、海外選手が招待されることになって、これに関して出場選手からは続けてほしいという声が多いが、大学によってはちょっと、という本音もある。これについて栗山委員長から補足を。

栗山　アンケートを見ると、通常なら日本選手の中で１位になれば当然優勝として評価される。その評価が大学によって違う。特に私学においてはそういうところでかなり評価のポイントが高い大学もある。それに伴って指導者の業績評価として反映されるところもある。例えば大学の指導者なら、研究論文が昇任に必要になるが、実績が論文１本に値するというところもある。全国大会での結果が評価として非常に重要になる。選手にとっては報奨金も学生のメリットになる。たまたま外国人選手が参加した種目で自分の順位が下がるとちょっと困ったなという選手も出て来る。そういうことを（当時の）関岡会長にどうなのか聞いたら、そんな小さいことを言うな、それに勝つ選手を育てればいいと言われた。まさにそうだが、台湾から来た、やり投の選手がユニバーシアード大会2017で優勝した（９１ｍ）。そういう選手と競う機会はなかなかない。現地（台北市）でその選手（鄭氏）と会った時に日本選手と台湾選手の友好があったかと思う。

オープン扱いという１つの方策もあるが、外国選手が来て日本に来てもそういう扱いになればあまりにも評価が低くなる。従って二つの表彰の形を取るのもありなのかなと思う。

船原　指導者としても選手としても本音の部分で紹介してもらったが、もしアジアパーミット大会になれば順位のところが非常に重要になる。そうなればオープン参加というわけにはいかないだろう。その場合は考え方を整理しなければならない。今はそこまで行っていないが、オープン参加にしてはどうかという声があるのは事実。皆さんのお考えを聞かせていただきたい。東海大学の植田先生、いかがでしょうか。

植田　参加標準記録を上げてきて、日本インカレとの違いを出すということで個人選手権ができてきたと思う。インカレに出られない人も出場していい成績を出すという強化の方針だった。ある程度参加標準基準が必要なのでオープンというのは

考えられないと思う。

ＩＡＡＦのランキング制度が始まったが、オリンピックと世界陸上が対象だと思う。それならば、ちょっとした発想ですが、この大会も独自のランキング制度での出場資格もありと思う。日本学連独自のランキング制度を作って、その大会の上位５～３試合のランキングの中の上位30傑で出すというのも面白い発想かと思っている。従ってオープンは良い策ではないと思う。強化のためにその大会に出るという目標にするようなものがあればよいと思う。

この大会でいい成績を収めたら、ある程度のメリットや報奨金なり特典が与えられ、競い合うのもありかなと思う。

船原　さきほど吉村先生からも指摘があったように、勝ったことによるご褒美があってもいいのではないか。この大会だったら何か少し考えてもよいと思う。平塚市の支援もあるので経費があまり掛かっていないようだ。財政的に可能ならばより魅力的な大会になるのではないか。

３．海外選手のオープン

船原　海外選手についてオープンにすべきか、そうでないかの意見があるが、これに絞ってもう少し皆さんの声を聞きたい。長沢先生いかがですか。

長沢　秋田大学で30年以上にわたって指導して、この大会ができた頃から５～６人が出場して２人ほど入賞した。日本選手権でも入賞した医学部の広田という学生はこの大会に一度も出ていない。タイミングの問題もあった。彼女は2020年五輪を目指していて、ランキング制度でそこにつながるならば出るのではないかと思う。個人選手権の出場資格を持っていても秋田から旅費をかけてまでは出ないという選手もいた。現状を紹介させていただきました。

神尾　台湾からの選手を引き受けようという時にどういう資格で入れるかの話があった。どうせなら世界の誰でもいいという大会にしようという話もあったのも確か。それを今どうしようとしているかわからないが、経緯はそんなふう。誰とでもやろう、それが個人選手権だという話だったように思う。

船原　国内にいながら海外の選手と競技ができるという、なかなかない機会。しかも学生レベルで経験できるので、ぜひこれからもいい環境を続けてほしい。オープン参加扱いはどうでしょうか。

吉村　関根先生の話は世界的なレベルだが、日本レベルを考えると、例えば３カ国以上の国の選手が出場する大会はポイントを高くするとか。研究でも国際学会の場合は30点、国内学会では10点などの例がある。数か国が集まったらポイントを高くするとか、そういう風にすると参加のモチベーションが上がるのではないか。世界にチャレンジできる人はそれでいいが、日本独自のランキング制度があってもよいのでは。あまり現実的でないですが、ポイントが最高順位（または平均ポイントの最高）の人が表彰されるとか、そんな感じの発想も面白いのかなと考えた。

三条　吉村先生の発想はいろいろあって、船原さんがまとめたように変化し得る要素はいろいろあると思うが、今はいろんなことを制度として変えなければならないので面白いけど難しいなと感じた。

船原　海外選手に関しては概ね、オープン参加はどうなのか、ちゃんと順位をつけた方がいいという声が多かったように思う。今年もその方向性は変わらないと思いますが、今後の課題としてはランキング制度との兼ね合いでどうなるのか。

４．大会のグレード・アップ

三条　ＩＡＡＦランキング制度はオリンピックや世界選手権に出るための発想だと思うが、学連の試合は一番下のグレードとのことだったが、それ自体を上げる方法はあるのか。

関根　国際陸連は世界の競技会が数千しかないだろうと判断している。あまり記録申請が上がっていないのが事実。一昨日の学生の研修会で話をしたが、学生の競技会をできればすべて国際陸連に記録申請したい。協力してほしい。日本でこんな大会をやっている。アジアパーミット大会を取ってこなくても個人選手権にアジアの国から競技力の高い選手を呼んで、こんな最高のパフォーマンスをしていますよ、という主張を記録申請でしっかりしていく。そういうことがいくつも重なって認められてくれば、やはり大会のランキングも変えていかなければならないという考えを持ってもらえると思っています。とにかく今は日本の学生がこういう大会で高いレベルで競技しているということを国際陸連にしっかり知らせるために国内だけでもなく世界にも発信していきたい。そういうことを発信しないとなんの主張もできない。第一段階では、日本学連競技委員会ができることと

してそういうことから始めていこうと考えている。

船原　これも関根先生から聞いた話ですが、箱根駅伝の予選会（ハーフマラソン）を数百人が走る。あの記録の水準の高さは世界的に見ても非常に驚くべきもの。あれだけの沢山の選手があれだけの記録で走ることはもっとアピールされてもいいのでは。

ＩＡＡＦの記録のランキングでは今は男子100ｍの千傑位で11秒0くらいですか。やっと10秒台くらいでしょうか。（関根さんの声：まだ始まってばかりなので？・・）　実際はそんなことはないはず。11秒0で走れるのは世界で千人しかいないのではなくて、日本だけでももっといるかも。まだシステム化されていない国も多いし申告されていないのでは。日本がいち早く記録を申請して高いレベルでやっているよ、ということをもっとアピールすれば、それだけこの大会のステータスが上がるかも知れない。

日本の学生の大会がこんなことをやっているということをアピールしていくことで、三条さんの言うように、大会のグレード自体を上げることができるかも。心強い思いがします。そういうことに是非地方学連でも協力していただいてアピールしていければと思う。

５．大会運営のレベル・アップ

船原　大会運営のレベル・アップについては、地元との協力関係や東海大学でのハンマー投の見せ方、大会の見せ方（アナウンス）など。時期的に七夕祭りのこともある。宮崎幹事長いかがですか。

宮崎　１）地元とのタイアップについて。平塚は七夕祭りが有名。地元と連携をして七夕まつりをアピールしたい。平塚市から笹をいただいて看板の横に置き、短冊を観客の皆さんに書いていただくイベントをやらせていただいた。２）ハンマー投は場所が離れていて、翌日にダイジェストを動画で流すことはできるが、当日の放映は今後の課題。３）アナウンスは地元の陸協の先生に協力していただいている。日本陸連のアナウンスしおりを参考にしてやっている。４）優勝者インタビューは学生幹事と地区学連幹事のご協力もいただいて行っている。大変好評なので今後も続けていきたい。

船原　インカレより自由度が高く、学生たちの活動も見える大会。総務委員会でもいろんなことを考えている。障子委員長いかがですか。

障子　総務委員会では広報全体の話が出ている。競技場が離れている東海大学でのハンマー投はインターネットでＳＮＳを中心に広報できればという話が出ている。また地元との連携では、地元商店街にポスターを配ったら。例えば入場券の半券を持って行けばビール１杯無料にしてもらうなど、そのような形で地元を巻き込んで集客をしたいという話も１つの案として出ていた。

船原　ＳＮＳについての話も出ていましたね。広報活動としてこの大会は割りと自由にできると思うが。何か追加がありましたらご紹介ください。

障子　日本インカレも含めてインターネット配信、ツイッターは既にかなり導入しているのでこの大会だからということは特にないが、会場が離れているところ（ハンマー投げ）ではダイジェストという形でしか今は紹介できないので、これをＳＮＳやインターネット中継などでライブが見られる工夫をしたいなという話はしている。

船原　競技運営全般については神奈川陸協にもかなり協力してもらっている。運営面などのご説明をお願いします。

関根　日本の競技運営のレベルは世界と比べるとかなり高い。一つ一つの陸協がかなり頑張っていて、特に注文をつけるところはほとんどない。個人選手権は一人一人の選手が最高のパフォーマンスをすることを願っている。どうすればパフォーマンスが最高にできるのか、そういう環境ができるのかを学生と一緒に考えて、競技役員の先生にも協力していただくようにお願いしている。あまり早く選手を入場させない、雨の中で立たせて紹介しないなど。選手に一度聞いたことがある。選手紹介は雨が降っているのでどうしようか。割愛していいかと聞いたら、選手は是非やって欲しいとの回答でした。「これから走ります」「これから投げます」という紹介をしてほしいと。そこで大西さんに透明のできるだけ大きなビニール傘を何十本か購入してもらって、選手が気持ち良く競技に入れるような工夫もした。すべて学生の発想です。我々がどうやったらそれを実現できるかということを大人のレベルで考えて、事務局長と予算面の話し合いをしながら、少しずつ競技運営に生かせるようにしている。皆さんからもいいアイデアや選手からの要望等があれば、お寄せいただいて学生と真剣に考えながら毎年グレードアップできるような大会にしたい。

６．個人選手権の開催時期

船原　大会の検証からパーミット大会の展望などをざっと駆け足でやってきたが、積み残しの論議になっているのが開催時期の問題。いろいろな意見があった。ユニバーシアード大会の選考会にするにはかなり早い時期にしなければならない。先ほどの吉村先生の３月や11月はともかくとして、今の６月をもう少し早くできるのか、など。そのあたりに絞って意見を聞かせてほしい。栗山先生いかがですか。

栗山　６月という時期が、いい結果を出さすための条件を整えていてもなかなか反映されないという結果になるならば、海外遠征の何かの選考会になりうるような大会にすることが、大会の位置付けとして高まるのではないか。いろいろの大会日程が過密状態で、どこに個人選手権大会を組み込んでいいのかが非常に難しい。例えば４中旬～５月中旬は日本陸連開催の日本グランプリシリーズが毎週のようにある。そういう大会にバッティングさせるように個人選手権をもってきた時に果たして調整可能なのか、また日本陸連も含めいろんな団体との協議の中で試合の位置付けをもう少し考えていければと思う。

ユニバーシアード大会はほとんど７月上～中旬に開催されるという現状を考えると、そこから逆算すると選考は５月上旬がリミットになる。この大会を最終選考会と位置付けるならば、４月下旬か５月上旬に開催できれば最高の選考会になり、個人選手権のグレードも上がるのではないか。台北のユニバーシアード大会は時期が遅かったので通常の時期に個人選手権を選考会にでき、参加選手のパフォーマンスも平均的に高かったように思った。

船原　５月開催という話もでましたが、地区インカレとの兼ね合いはどうか。何か問題点をご指摘いただければ。

杉山(北海道学連)　私も学連と陸協のスケジュール調整をいろいろしているが、かなり過密であると思う。北海道の学生の大会もなかなか入っていかないところに個人選手権の日程をどうするかは大きなハードルかな。例えば、５月上旬となると隔年で行われているユニバの選考大会につながると思う。ご承知のようにユニバの最終選考会になると非常に盛り上がる。それ以外の選手権は盛り上がりがない。今年はゴールデン・ウィークがかなり長いです。来年度以降もそうなる可能性があるならば、学生のゴールデングランプリという形でゴールデン・ウィークのどこかに日本陸連のグランプリシリーズと並行していくと、先ほどのアジアパーミット大会とうまく重なっていってイメージ的にもアップして質も上がっていく。まさに我々が狙っている個人選手権のステイタスを高めることができるチャンスになるかな。まさに変化になるきっかけになるのかなと思う。

船原　地区学連の先生方、もしご意見がありましたら。日程調整はどこも頭を痛めておられると思いますが、この個人選手権大会が別の時期になるとまた調整が必要になると思うが。

黒須（東海学連）　「日の丸」が懸かった選考大会になるのは非常にいい。賛成。個人選手権に関しては、そういう意味では本大会を意識し今やっている時期にしたり秋にしたりと柔軟でいいのかな。次の試合につながるためには、個人選手権が絶対に６月でなければいけないということはない。時期はいつでもよい。

海外選手の扱いについては、800ｍまでの距離はレーン数が決まっているので、決勝で海外の選手が入ったために選考に関わってほしい選手がレーン不足で走れなかったというのは良くない。別のアイデアが必要になる。

船原　時期については実務的に何か難しいことがあるようです。大西事務局長、何か補足を。

大西　ユニバーシアード大会の状況を見ると最近は７月初旬の開催が大変多くなっている。前回の台北2017は８月中旬・下旬で特殊な開催期日でした。今年のナポリ2019も７月第１週から始まります。ＪＯＣは２カ月前が締切りで、今回は５月７日です。今後もこれが続くと、７月上旬の開催については今までグランプリシリーズでお世話になっているが、本当に出たい選手がグランプリ大会に出られないとか、同じ土俵で戦えないことになる。いろいろの分散した大会での選考なので非常に不都合があり、この大会でしか選考ができないということが実情です。

従って台湾2017の選考会（個人選手権）の時、いい記録が出て大変盛り上がりました。期日を変更することによって選考競技会として開催できるのかなと思う。強化委員長が各陸協（陸連、兵庫など）との調整は必要になるが、中身をみると、ごくわずかな選手しか対象にならないことを考えると、思い切って４月のどこかに開催するのも面白い変化になるのかと思う。ユニバーシアード大

会の開催期日を考えると、学連主体で代表選手を選ぶとなるといろいろ考えたらよいと思う。

船原　開催期日について他にいかがですか

鶴崎（中国四国学連）　開催時期は５月で構わないと思うが、選手の立場だと春の時期に標準記録を出したので個人選手権に出られる選手もかなりいると思う。大会が早まると選手が出られる枠を狭めてしまうのではという懸念があります。

三条　今皆さんの話を聞いて、個人選手権を早めると、その後に地区インカレが行われる。他地区の事情はよく分かりませんが、それもありかな。固定概念として地区インカレがあって個人選手権があるというイメージしか持っていなかったが、その改革もありかな。選手も地区インカレも大切であるが、個人選手権があって、その後に地区インカレがあるとなればそれなりのコンディションができると思う。北信越学連では今５月中旬に行っているが、グラウンドの確保は別として、もう少し遅らせることのデメリットはなさそうなので、結論としては、そのへんも含めて大胆な発想の転換もできるのでは。

船原　大西さん、平塚は４月、５月の開催でも大丈夫でしょうか。

大西　平塚のありがたいところは、この大会を最優先してくれている。たぶん問題ないと思う。

船原　ありがたい状況ですね。三条さんからの指摘がありましたが、今までの固定観念を地区インカレが終わってからね、というのをばらしてブレーンストーミングができたのではないか。開催時期も別の視点から考え直せるのではないか。ユニバーシアード大会の選考会を頭に置いて、大会のグレードを上げるとか、選考会のステータスを上げるなどの意味もある。

おそらく台湾やアジアの選手にとっても早い時期は望むところではないか。欧米の選手とタイムスケジュールが違うのであまり問題ではないと思う。

ここでまとめるわけではありませんが、皆さんのご意見を伺っている範囲では十分検討に価するのではないかと思った。まだいろいろのご意見があるかもしれませんが、当初の予定時間を少しはみ出した。皆さんのご意見は伺えたと思う。今日の会合の意味はあったと思う。ありがとうございました。

Ⅳ．まとめにかえて、閉会挨拶

＜まとめにかえて＞

司会　それでは本日の会議のまとめを阿保委員長にお願いいたします。

阿保　活発なご意見をいただき、ありがとうございました。演者の皆さん、ありがとうございました。今ここでまとめよ、と言われても不可能です。今後、報告書（要旨）を作成し、ホームページに掲載します。今日の討議内容は決定事項ではありません。今後の個人選手権を考えていく上で、貴重なご意見がたくさん得られたと思っております。今までなかった発想もかなりありました。重ねてお礼申し上げます。

＜閉会挨拶＞

司会　最後に閉会の挨拶を永井専務理事にお願いいたします。

永井　皆さんの質問を聞いていると全部私にされているような質問ばかりと感じた。理事会でも話したが、日本学連の事業は年がら年中やっている。１つ終わると次に向かう。ある大会の企画立案をして、実行して、そして評価をするべきが、大会が終わると評価ができていなかった。今回は個人選手権をターゲットにして総括していただいたことにすごく意味があったのではと感じる。

具体的な質問について言います。この大会の始まりは新人の登竜門というねらいで始まった。紆余曲折を経て今日の形になった。ある時はユニバーシアード大会の選考会にしたり、ある時は選手権にしたりして今日の形になった。話を聞いていると、新人の登竜門にする大会のままにするのか、ユニバの選考会をターゲットにするかで分かれていると思った。

大会の開催場所は、財務的なことや昔からの関係を考えると平塚かなと思う。補助グラウンドについては、１年半ほど前に公共施設だからサブトラックはできないが、ウォーミングアップ場を造ろうということで植田先生、安井先生と３人で平塚の方々と交渉した。形はできていて、いつお金が付いて実行できるかという状況になっている。80ｍ～100ｍの直線３レーンとその先に砂場、屋根もある。市民の施設だからそんなに大きくできないが。経費の面でも３日間も使わせてもらいながら、話があったような状況。ただ去年は個人選手権、実学、日本インカレと神奈川陸協にお世話になった。高齢化も進んでいてインカレ最終日に

はかなり音を上げている審判の方がいたので、平塚を利用させていただいているのもいいが、なかなか難しいかな。今後他会場も考えなければいけないとも思った。

もう一つは時期的な問題。選考会は４月20日ごろにやればいいことだが、多田君一人が他の大会と重なる、広島に来てくれとなるからこちらの大会がつぶれるというような可能性もある。そういうところで私の立場としては陸連、指導者、学生、経費等について考えている。この大会が始まった時より間違いなく進化していると感じる。ポイント制度等もあるので今後はアジアの学生も巻き込んでアジアパーミット大会のような形に持っていきたいなと考えている。その間いろいろな問題も出てくると思うが。ある意味では目標を持っていないとその大会に到達しないので、そういうことを考えております。今日はいろいろ検証していただいてありがとうございました。以上です。ありがとうございました。

司会　本日の演者の方々に拍手をお願いします。以上をもちまして第64回指導者会議を終了します。皆さん、長時間ありがとうございました。

以　上

資料１　しおり（テーマ、趣旨、プログラム、演者ら）

平成３０年度 第６４回指導者会議

個人選手権大会のあり方を考える―検証と課題―

日本学生陸上競技連合では、日本陸上競技界の発展のため、毎年「指導者会議」の名の下、シンポジウムや講演等を通じて競技者の強化に関するさまざまな課題について考えてきました。

過去４回の指導者会議は、「日本学生陸上フォーラム」や「ユニバーシアード強化研究会」の名称で討論が行われ、多くの成果を得ることができました。

今回の第64回指導者会議は、上記会議の成果等も参考としながら、日本学連が主催する個人選手権大会に焦点を置きます。会議の目的は、今後の個人選手権大会のあり方を考えるために、中長期的な視点に立ったアジアパーミット大会の開催も視野に入れながら、現状の検証を行って今後の課題を明らかにすることにあります。各演者には検証の視点（注１）と資料（注２）を参考にして発言してもらいます。また進行についてはフロア（指導者や学生幹事ら）も含めて活発な意見交換の場になるように努めます。

注１）検証の視点：個人選手権の特徴、個人選手権の競技運営2018

注２）参考資料：個人選手権の歩み、日本ＩＣと個人選手権の関係、ＩＡＡＦランキング制度、アジアパーミット大会等

□　主　催　公益社団法人日本学生陸上競技連合
□　日　時　2019 年（平成 31 年）3 月 9 日（土）＜理事会終了後、会議：15：30～17:00＞
□　会　場　中央大学駿河台記念館　６７０号
□　対　象　日本学生陸上競技連合関係者(地区学連、加盟校等)、陸上競技愛好者（大学等）
□　定　員　120 名

プログラム

15:00～15:30　受付
15:30　開会挨拶　松本正之 氏（会長）
　　提案趣旨　阿保雅行 氏（指導者会議運営委員長）
　　１部　「検証と課題」
　　２部　「アジアパーミット大会開催の可能性と展望」
16:55　まとめ　　阿保雅行 氏（同上）
　　閉会挨拶　永井　純 氏（専務理事）
17:00　終了

演者　（順不同）
　宮崎芽衣 氏（日本女子体育大学、学生幹事長）
　二見百香 氏（日本体育大学、学生副幹事長）
　栗山佳也 氏（大阪体育大学、学生連合：常務理事・強化委員長）
　関根春幸 氏（東京都立世田谷総合高等学校、学生連合：常務理事・競技委員長）
コーディネーター　船原 勝英 氏（共同通信社、学生連合：指導者会議運営委員）
司 会　障子 恵 氏（跡見学園女子大学、学生連合：理事・総務委員長・指導者会議運営委員）

資料2　本テーマの枠組み（イメージ図）と検証の視点　　（2019-2-25 時点）

個人選手権大会のあり方を考える―検証と課題―

		1部								2部（可能性の検討） ⇒	
	個人選手権の歩み（1990～2018）（29年間）	学生選手権90～97	種目別選手権98～02	ジュニア選手権03～04	チャンピオンシップ05～07	個人選手権08～18	➡	2019	➡ 2020 東京五輪	➡ 2021	➡ 20?? ➡
検証の視点	横：1）29年間の歩み（成果は？）	○	○	○	○	資料2（資料2-1～資料2-12）					
	縦：2）とりわけ2018大会の実態（計画・実施・評価：　出来る範囲で）	―	―	―	―	◎					
アイテム	**カテゴリー**										
Ⅰ　（開催）要項							今後の課題とは何か	2019大会の目標？課題？施策？			
引用：2018学生連合便覧	主催・後援・運営協力・協賛・**期日**・会場・競技種目・**競技実施日**・**参加資格**・参加料・申込方法・式典・表彰・注意事項・その他	―	―	―	―	―					
	<参加資格（**標準記録**）　2018個人＆IC	―	―	―	―	資料2-13					
Ⅱ　成績											
1、競技結果（数値レベル）	2018年：個人選手権（＆日本IC）	―	―	―	―	資料2-14					
	IAAFランキング制度の導入（2018～）	―	―	―	―	○					
2．経験（意識レベル）：	優勝者のｱﾝｹｰﾄ回答	―	―	―	―	資料2-16					
Ⅲ　条件											
1．組織体制	事務局										
	学生役員					演者2名					
	委員会	―	―	―	―						
	・総務	―	―	―	―	―					
	・強化　⇔ ｱﾝｹｰﾄ回答	―	―	―	―	演者1名／資料2-15					
	・競技	―	―	―	―	演者1名					
	・医事	―	―	―	―	―					
	・財務	―	―	―	―	―					
	・国際	―	―	―	―	―					
	地区学連：　8地区	―	―	―	―	―					
2．競技場	主競技場／練習場	―	―	―	―	○					
	ハンマー投げ	―	―	―	―	○					
		―									
3．競技運営	例えば、	―	―	―	―						
	・競技日程	―	―	―	―	○					
	・競技規則・競技注意事項	―	―	―	―	○					
	・審判員・審判	―	―	―	―	○					
	・決勝A、決勝B（5種目）	―	―	―	―	○					
	・競技会の盛り上げ方	―	―	―	―	○					
	・事前準備／打ち合わせ	―	―	―	―	○					
	・その他	―	―	―	―						
4．情報（提供、報告等）	上記Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、の関係	―	―	―	―	今回検討せず					
5．諸経費（会計）	個人選手権の諸経費	―		―		今回検討せず					
6．時間	上記Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、の関係（いつ：タイミング、回数）	―	―	―	―	今回検討せず					

注1）資料2：個人選手権大会の歩み（概要）

注2）ﾌｫｰﾗﾑ2017（2017-3-4）で提案された今後の課題(伊東浩司氏)：

① 情報の共有化 、 ② 選手の共同育成、 ③ 選手への情報提供、④ 海外大会への出場

資料３　第１部・第２部の経緯と各部の構成内容　　2019-2-21 時点

第１部　個人選手権大会のあり方を考える―検証と課題―

＜はじめに：経緯と構成＞

第４回指導者会議運営委員会（2018 年７月）で個人選手権と日本インカレのあり方などに関して意見交換を行った。その内容を（できるだけ）キーワードで次に示す。（順不同）

- 個人選手権と日本ＩＣの関係
- ＩＡＡＦランキング制度の導入
- 日本版ＮＣＡＡ
- クラス２（競技場）
- ユニバーシアード選考会
- 記録更新（良い記録）
- 全国大会の優勝の意味
- ランキングを１つでも上げる
- 学生がパワーを発揮できる環境とは
- 拠点化の可能性はどうか
- ランキングを上げる環境とは
- 個人選手権の時期はいつがよいか
- 国内で開催する国際大会にする
- （国内）国際大会　⇒　アジアパーミット大会
- 大会のレベルを上げていく（段階的に、目標は？）
- アジアパーミット大会の可能性・メリットなど
- 各委員会と事務局の体制はどうか（可能か、不可か）
- 学生側の体制はどうするか。
- 国際大会の運営はどうするか（一挙にはできない！）
- その他（　　）

－とりわけ個人選手権大会については、上記キーワードを次の視点から整理してみた。

第1部　個人選手権大会のあり方を考える―検証と課題―
＜１＞　個人選手権と日本ＩＣの関係
＜２＞　個人選手権の意義・目的
＜３＞　個人選手権大会を検証する際の視点
＜４＞　ＩＡＡＦワールドランキング制度と個人選手権大会 2018
第２部　個人選手権大会のあり方を考える―アジアパーミット大会開催の可能性と展望―（仮題）
＜５＞ アジアパーミット大会を開催するための条件
＜６＞ 個人選手権からアジアパーミット大会開催までの戦略的目標（重点目標）（イメージ案）
＜７＞ 日本学連の戦略的目標（重点目標）と任務等（イメージ案）

＜１＞　個人選手権大会と日本インカレの関係

１．特徴（共通性・類似性と相違性）・・・開催要項から見た特徴、例えば：
- 基本的事項・・・歴史的背景、意義、役割など（天皇賜杯の有無など）
- 出場条件：国内学生（院生）限定、海外学生(院生）含む
- 競技タイプ：　対校戦、個人戦　両者　⇐　・・判断は、表彰の有無（大学か、個人か）
- ユニバーシアード大会等の選考競技会（該当、非該当）
- 開催期日（2018 年）：個人選手権：6 月、日本 IC：9 月　　注）他大会との関係は？：日本選手権など
- 新記録の樹立：アジア記録（JR）、日本記録、学生記録、大会記録、ＰＢ、ＳＢ等
- （参照）資料１－１３　参加標準記録 2018：個人選手権大会と日本インカレ
- （参照）資料１－１４　競技成績 2018：個人選手権大会と日本インカレ

２．国際大会等の参加標準記録突破を目標とする大会（の１つ）　⇐⇐ 学生アスリート・監督・コーチら
- その大会で、アジア記録（含 Jr.）、日本記録、学生記録、大会記録、ＰＢ、ＳＢ等の樹立！

国際大会として、例えば、
- 「ユニバーシアード大会」「アジア選手権」「アジア大会」「世界選手権 2019」など
- 「東京五輪 2020」（IAAF ランキング制度？）など

＜２＞ **個人選手権大会の意義・目的　　視点として、例えば：**

・主催者の視点：　日本インカレとの関わり、個人選手権の歩み・・・（参照：資料４）

・学生アスリート／コーチ／監督の視点・・・・・参加のねらいや理由等は？

○両者の共通点：　**良い記録を出すこと（アジア記録、日本記録、学生記録、大会記録、ＰＢ，ＳＢなど）**

（ルール遵守下での最高の競技運営などを背景として）

○**学生アスリート**の目標や理由等、例えば：

・国際大会等の参加標準記録を突破したい

（東京五輪／ﾕﾆﾊﾞ大会／U20 大会／他の国際大会に日本代表として出場したい）

（世界選手権（IAAF）出場のためのポイントを獲得したい）

・全国大会で優勝（～入賞）したい

・**国際大会に準じる個人選手権大会**で活躍したい（チャイニーズタイペイ、香港等の学生アスリートとの競技）

＜３＞ **個人選手権大会を検証する際の視点**

第６回指導者会議運営委員会（2019 年１月）で「個人選手権大会のあり方を考える―検証と課題―」についての意見交換があった。とりわけ検証の視点についてはおよそ次の通りであった。（順不同）。

◇テーマ：**「個人選手権大会のあり方を考える―検証と課題―」**

◇演者：　学生（幹事長、副幹事長）、強化委員会（委員長）、競技委員会（委員長）

○個人選手権そのもの（目的的）　＋　世界選手権等に出場するための１大会（手段的）

○よい条件下で競技をしてよい記録を出す！

・アジア記録（含 Jr.）が樹立したときのためにクラス２（IAAF 公認）の取得が必要・・・要請

・走路の劣化チェックについての資料収集

・同一種目における決勝Ａ、決勝Ｂなどの設定

・記録表示（パーソナルベスト、シーズンベストなど）・・・数年かけて完成させたい

○海外の学生アスリートと競う！（例えば、チャイニーズタイペイ、香港、シンガポール　＋α　）

・学生アスリートの国際的経験値を上げる（無し ⇒ 有り）

・異国選手に刺激されて日本人選手がベスト記録を出せるような競技会になれば！

○ＩＡＡＦランキング制度について（世界陸上 2019 に適用しない：朝日新聞、2018-11-13）

○学生らが主体となって今後の方針作成を！　⇒　競技委員会が具現化する

・いい競技会とは何か？・・・例えば、選手・客・役員の一体化

（いい雰囲気で、目玉種目の曜日・時刻・場所、お客の気持ちは？）

（アナウンスのタイミングや内容など）（カメラの視点：　水泳競技　VS　陸上競技）

・個人選手権の目玉種目とは？　⇒　100mなど：地元（商店街）と提携して宣伝をする。

広報戦略・・・・福井県の例（インカレ 2017 と国体 2018・・観客多数）

・ハンマー競技の見せ方（現在、東海大で実施。これをどう見せるか？　ビデオ？）

・棒高跳・走高跳・走幅跳などをビデオカメラで終始撮影し、パソコンなどでライブでも見られるようにする。（トップ８？　固定カメラで？）

（参照）資料８　アンケート結果（強化委員会委員対象）、資料９　アンケート結果（優勝者対象）

＜４＞ **ＩＡＡＦワールドランキング制度と個人選手権大会 2018（ or 日本インカレ 2018）**・・・T&F 中心

大会カテゴリー	F　各国の公認競技会（TF のみ）
記録スコア	有
順位スコア	有　（1 位 15、2 位 10、 3 位 5 点）

注１）資料の出所：アジアパーミット大会の説明会（日本陸連、2018-7-12）の配布資料の一部。

注２）大会成績（2018）を日本陸連に申請済み（学連事務局より）　・・・記録スコアと順位スコア

参考）メリット：パフォーマンススコア（記録＋順位）より世界における自分の位置がわかる。

・学生アスリートは今後の目標をより具体的に設定できる（であろう）。

第２部　　個人選手権のあり方について考える―アジアパーミット大会開催の可能性と展望―（仮題）

「考える」視点：　現状でできることとその限界について
将来、何を変えると展望が開けるか

＜５＞　アジアパーミット大会を開催するための条件

開催条件：アジアパーミット大会の説明会で配布された資料の中から競技運営に関する内容を一部抜粋したものである。（尚、詳細については同資料参照のこと）

項　目	内　　容
・AAA パーミットとは	T&F:　B カテゴリー 記録スコア　　ここでは省略します。 順位スコア　1 位：100、2 位：80、3 位：70、4 位：60、5 位：55、6 位：50、7 位：45、8 位：40 点
・AAA パーミット登録	必須
・対象競技会	「１」～「５」まで省略します。 「６」　上記以外で、AAA パーミットを希望し、日本陸連が認めた競技会（レース）。
・メリット（４点）	・大会公式印刷物や制作物に AAA ロゴ使用可 ・大会名称に「ＡＡＡパーミット」と並記可 ・海外からの参加が増える可能性 ・ＩＡＡＦポイントランキングにおける大会カテゴリーがアップ
・主催者の義務（６点）	・AAA 加盟すべての陸連に招待状を発送　（※１　資料１３頁参照） ・各国からの問い合わせに回答（※２　資料１３頁参照） ・ビザが必要な国への招へい保証書発送（※２　資料１３頁参照） ・参加選手への来日後のケア（※２　資料１３頁参照） ※２：：　主催者にスタッフがいなければ、旅行会社と契約し、業務委託することを推奨する。日本陸連が紹介することも可能。 ・プログラム、スタートリスト、競技方法の英語表記（※３　資料１４＆１５頁参照） ・IAAF 規則の適用（ルールブックの国内適用は使わない） ・注）ドーピング検査は AAA パーミット大会の必須要件ではない。
・開催条件	（　トラック＆フィールド）　　：　IAAF 認証競技場（クラス１、クラス２）で開催 （世界（エリア）記録が認められる競技場）など
・申請手続き 申請期限	以下のものを主催者（日本学連）が用意し、日本陸連から AAA に申請する。 ・申請書に記載する内容の詳細 ・年間登録料 250 ドル 目安は 3 月末まで。それ以降でも、申請可能。
・日本国内で申請できる競技会（T＆F）	以下の条件を満たす競技会（３点：詳細　略） ・主催後援競技会 ・大会当日に競技場が IAAF 認証を得ている競技会 ・主催者の義務を履行できる競技会
・AAA パーミット申請	AAA パーミットに該当する場合には、申請書を日本陸連が作成し AAA に提出。申請書作成のためには以下の情報を陸連まで。年間登録料 250 ドルは、各大会から直接、AAA 指定口座に送金。 １　大会（レース）名の日本語表記と英語表記 ２　開催都市名 ３　開催日 ４　IAAF 認証（トラック、コースともに）の有無 ※有る場合は証書を添付。無い場合は IAAF 認証申請手続きをすること。 ５　組織委員会（主催者）の名称と住所、電話、ＦＡＸ、e-mail、及び担当者名と連絡先 ６　２０１７年度参加国　　７　実施種目

注）大会カテゴリー：　OW（オリンピック・世界選手権），DF，GW，GL，A，B，C，D，E，F

注）資料の出所：　日本陸連、AAA パーミット説明会、2018 年 7 月 12 日、TKP 品川カンファレンスセンター

＜６＞　個人選手権からアジアパーミット大会開催までの戦略的目標（重点目標）（案）

戦略的目標（重点目標）：　例えば、

ステップ１：　個人選手権大会（～2017 年）　⇐⇐⇐ 個人選手権の歩み（資料１参照）

ステップ２：　ＩＡＡＦランキング制度の導入（2018 年～）

・個人選手権そのもの（目的的）＋世界選手権等に出場するための１大会（手段的）

・対象：海外（ｱｼﾞｱ）の大学生　⇒ 学生アスリートの国際的経験値を上げる（無 ⇒小・中）

・国際大会(海外参加国：少数)を開催するための諸条件整備・充実

ステップ３：　国際大会(海外参加国数：少数⇒数ケ国⇒多数)を開催するための諸条件整備・充実

ステップ４：　日本学連主催（？）のアジアパーミット大会開催

＜７＞　個人選手権大会からアジアパーミット大会開催までの戦略的目標（重点目標）と任務等（イメージ案）

将来、日本学連に「アジアパーミット大会実行委員会（仮称：案）」が新設されて、そこで年度別重点目標が明らかにされ、そのための条件整備や充実が図られていく場合のイメージ案（枠組み）を試みた。また事務局や学生幹事、各委員会委員らの役割・任務についても明らかにしていく必要があろう（尚、詳細は省略する）。

次の表は、個人選手権大会の「開催要項」を参考にして作成したものである。

	戦略的目標 （重点目標：主な特徴）	第１ステップ (過去)	第２ステップ ・IAAF ﾗﾝｷﾝｸﾞ制度 ・参加国（少数）	第３ステップ ・IAAF ﾗﾝｷﾝｸﾞ制度 ・参加国（多数）	第４ステップ ・ｱｼﾞｱﾊﾟｰﾐｯﾄ大会 開催
年度		～2017	2018 ～　????	???? ～ ????	???? ～????
開催要項	名称（日本語／英語） ・兼大会名 ・主催、後援 ・運営協力、協賛 ・期日、競技実施日 ・会場（施設） ・競技種目、参加資格 ・参加料、申込方法 ・式典、表彰 ・注意事項 ・その他	個人選手権	個人選手権	個人選手権	個人選手権／？
組織体制 **事務局** **学生役員** 委員会 地区学連	**・幹事長～幹事** ・総務 ・強化 ・競技 ・医事 ・財務 ・国際 ・８地区				
＜参考＞	・日本陸連 登録（英字でも） ・アジア陸連 ・競技規則(IAAF 規則) ・監督会議／英文表記 ・宿泊ホテル ・その他				

注）資料の出所：日本学連便覧２０１８、大会要項２０１８などを参照して作成した。

資料4　個人選手権大会の歩み（29年間の概要）

2019-2-21 時点

計画 ・ 実施									評価	改善点		
大会名	開催期日	日数	競技場	種目 数	参加標準記録	参加者数	参加国数（海外）	備考： ①ユニバ選考会、②U20参考競技会、③JAAF / IAAFとの関係、④運営や進行など	①競技成績、②運営など	今後の課題等は？	主要文献	通し番号
				男子 女子		男子 女子 合計						
第 1 回（種目別）	1990（H2）9-9	1	長野	15 10		- - 205		①シェフィールド（第一次選考）			資料4-1	1
第 2 回（種目別）	1991（H3）9-22	1	平塚	15 14		- - 322						2
第 3 回（種目別）	1992（H4）7-5	1	平塚	15 14		187 121 308						3
第 4 回（種目別）	1993（H5）6-11～13	3	国立	19 16		- - 365		①最終競技会と③日本選手権				4
第 5 回（種目別）	1994（H6）6-26	1	平塚	16 14		218 108 326						5
第 6 回（種目別）	1995（H7）6- 9～11	3	国立	19 18		- - 343		①最終競技会と③日本選手権				6
第 7 回（種目別）	1996（H8）7- 7	1	平塚	16 15		248 149 397						7
第 8 回（種目別）	1997（H9）7-5～ 6	2	札幌	18 15		372 244 616		①シシリー（最終選考会）				8
第 9 回種目別	1998（H10）6-27	1	平塚	17 14		296 190 486						9
第10回種目別	1999（H11）5-29～30	2	金沢	18 15		313 197 510		①マヨロカ（最終選考会）				10
第11回種目別	2000（H12）6-24	1	平塚	17 14		326 175 501						11
第12回種目別	2001（H13）6-14～15	2	北上	19 18		399 279 678						12
第13回種目別	2002（H14）6-22	1	小田原	17 14		- - -						13
第 1 回ジュニア	2003（H15）9-27～28	2	熊谷	18 17		425 359 784					資料4-2	14
第 2 回ジュニア	2004（H16）9-25～26	2	平塚	18 17		480 398 878					資料4-3	15
2005チャンピオン	2005（H17）9-10～11	2	平塚	18 17		492 453 945					資料4-4	16
2006チャンピオン	2006（H18）9- 9～10	2	平塚	18 17		509 437 946						17
2007チャンピオン	2007（H19）9- 7～ 9	3	平塚/日体大	18 17		654 560 1214						18
2008個人選手権	2008（H20）6- 6～ 8	3	平塚/東海大	18 17		644 594 1238					資料4-5	19
2009個人選手権	2009（H21）6-12～14	3	平塚/東海大	18 17		573 528 1101						20
2010個人選手権	2010（H22）6-18～20	3	平塚/東海大	18 18		601 617 1218					資料4-6	21
2011個人選手権	2011（H23）6-17～19	3	平塚/東海大	18 18		615 603 1218		①深圳：選考競技会				22
2012個人選手権	2012（H24）6-22～24	3	Sho/東海大	18 18		553 565 1118	1		学生新：男DT			23
2013個人選手権	2013（H25）6-21～23	3	Sho/東海大	18 18		563 519 1082	1	④「見ている人に楽しんでもらう競技会」	学生新：男Pv, Jr日本新：女HT		資料4-7	24
2014個人選手権	2014（H26）6-20～22	3	Sho/東海大	18 18		629 567 1196	1	④同上			資料4-8	25
2015個人選手権	2015（H27）6-12～14	3	Sho/東海大	18 18		659 596 1255	1	④同上			資料4-9	26
2016個人選手権	2016（H28）6-10～12	3	Sho/東海大	18 18		658 596 1254	1	④「魅せる陸上競技」	学生新：男100m		資料4-10	27
2017個人選手権	2017（H29）6- 9～11	3	Sho/東海大	18 18		774 600 1374	1	①台北：最終選考会（一般種目）、④同上			資料4-11	28
2018個人選手権	2018（H30）6-15～17	3	Sho/東海大	21 18	資料6	674 626 1300	3	②U20参考競技会、③IAAFﾗﾝｷﾝｸﾞ制度（資料3）、④同上	成績（資料7）	今後の課題？	資料4-12	29
2019個人選手権	2019（????） 6- 7～ 9	3	Sho/東海大									30

70年史&会報 / 80年史&会報 / 90年史&会報

注1） 大会名：
① 「第？ 回日本学生（種目別）選手権大会」は、「第？回種目別」と略す。
② 「第？ 回日本学生ジュニア選手権大会」は、「第？回ジュニア選手権」と略す。
③ 「？全日本学生チャンピオンシップ」は、「？チャンピオン」と略す。
④ 「？日本学生陸上競技個人選手権大会」は、「？個人選手権」と略す。
注2） 競技場（場所）：
① 「札幌市営円山公園競技場」は、「札幌」と略す。
② 「熊谷スポーツ文化公園陸上競技場」は、「熊谷」と略す。
③ 「平塚（ハンマー投：日体大）」は、「平塚/日体」と略す。
④ 「平塚市総合公園平塚競技場（ハンマー投：東海大）」は、「平塚/東海」と略す。
⑤ 「Shonan BMW スタジアム平塚（ハンマー投：東海大）」は、「Shonan/東海」と略す。
注3） 参加者数：大会プログラムに記載されている人数
注4） 参加国数とは海外からの参加国で、且つ大会プログラムの参加校一覧に記載された国とする。（チャイニーズ台北、香港、シンガポール）
注5） 備考： ①ユニバーシアード代表選手選考会、②U20世界陸上競技選手権大会派遣選考参考競技会、③JAAFやIAAFとの関わりなど
④運営や進行など
注6） 評価の視点： ①競技成績（大会新、学生新など）、②競技運営（日程、運営など）、③その他（満足度調査など）
注7） 今回提出できなかった各種資料（地区学連別データ集計：参加者数と成績など）

以 上

資料５　大会名の変遷理由と学生幹事らの諸活動（資料４の補足）

（注:引用文献の執筆者名は本稿では割愛させていただきます）

＜１＞　大会名称の推移
学生選手権／種目別選手権　⇒ ジュニア選手権　　⇒　チャンピオンシップ　⇒　個人選手権
資料 4-1　　資料 4-2・資料 4-3　　資料 4-4　　資料 4-5

資料 4-1：　日本学生（種目別）選手権大会　＜創設の経緯＞

１）文献：日本学生陸上競技連合（1998）日本学生陸上競技７０年史、264 頁

「ユニバーシアード大会を始め、学生競技者の競技力を国際競技会で発揮することが要求されているが、日本学生陸上競技対校選手権大会が大学対校の団体ゲームであることから、競技者個人の力量を十分に発揮することができにくいという意見が出ていることに伴い、学生連合の登録競技者が、あくまでも個人の競技者資格で種目別の学生日本一（選手権）を競う競技会が必要であろうという意見の高まりを見ることになった。

そのような理由から昭和 59 年と 60 年に学生選抜陸上競技会を開催したが、諸般の事情からしばらく開催を見送らざるを得ないという状況であった。しかし、ユニバーシアード大会での高い競技力の発揮のために、また、インターカレッジには大学代表としての出場はできないが、個人的には高い競技力を有している競技者が多い等の理由から、学生選手権大会開催の要求が以前にも増して高まってきた。

そのような雰囲気の中で、1990 年に第１回**学生選手権大会**を長野市において開催した。その後は、主に関東地区（平塚市）を舞台にして**１日日程の競技会**として回を重ねてきたが、その間、西暦偶数年には、ユニバーシアード強化策の一環として、学生選手権と実業団対学生陸上を続けて開催するという試みも行うことになった。

また、第４回大会と第６回大会は、日本選手権大会との同時開催（日本陸上競技連盟と共催）として国立競技場を舞台に、ユニバーシアード代表選手最終競技会として実施された。

1997 年度大会は、ユニバーシアード・シシリー大会の代表選手最終選考競技会として札幌円山競技場を会場として、初めて**２日間日程**の競技会を開催し、これまでにない参加者を数え、充実とした大会とすることができた。

この大会も回を重ねるごとに充実の度合いを高めているが、**設立当初の目標である「登録競技者の中で、競技力の高い競技者の参加によるレベルの高い競技会を短時間のタイムテーブルで消化し、競技会の魅力を観衆に対してアピールする」こと**も狙いとした。そのために、競技成績に対応した表彰の仕方等の工夫も実施しているが、新しい競技会のスタイルとして徐々に定着の度合いを高めている。

しかし、学生選手権大会を学生対校選手権大会と混同視するという関係者の意見を受け、1996 年大会から、**学生種目別選手権大会**と名称を改めて実施することになった。1999 年は、金沢市を会場として、ユニバーシアード・マヨロカ大会代表選手最終選考競技会として、２日間日程の競技会が計画されている。」

資料 4-２：「第 1 回日本学生ジュニア選手権大会」、2003 年（H15）

１）文献：日本学生陸上競技連合（2003）会報第 98 号、10 頁

出場資格：①平成 15 年度日本学生陸上競技連合登録競技者。②・・・略・・・、別紙の標準記録に達した者。但し、７月開催の天皇賜杯第 72 回日本学生陸上競技対校選手権大会の８位入賞者はその当該種目に限り申し込むことができない。③各校１種目あたりの出場人数制限はない。④同一人の出場種目数制限はない。

２）文献：日本学生陸上競技連合（2003）会報第 100 号、12 頁

「従来の種目別選手権大会と趣を変えて**ジュニア選手権**として開催した。出場者は日本 IC 当該種目の入賞者を除く条件、いわばセカンドインカレ的要素を取り入れた大会とした。」

資料 4-３：「第 ２ 回日本学生ジュニア選手権大会」、2003 年（H16）

１）文献：日本学生陸上競技連合（2004）会報第 104 号、2 頁

「基本的な考え方として、ジュニアの定義を年齢ではなく、競技力としている。」

資料 4-４：「2005 全日本学生チャンピオンシップ」、2005 年（H17）

１）文献：日本学生陸上競技連合（2008）、日本学生陸上競技８０年史、136 頁

「本年の大会より大会の名称が**全日本学生陸上競技チャンピオンシップ**に変更され、日本インカレ入賞者も参加可能､そして多くの選手が参加できるよう参加標準記録も低く設定された。」

２）文献：日本学生陸上競技連合（2005）会報第 106 号、12 頁

出場資格　①平成 17 年度日本学生陸上競技連合登録競技者。②・・・略・・・、別紙の標準記録に達した者。③各校 1 種目あたりの出場人数制限はない。④個人の出場種目数制限はない。

資料 4-５：「2008 日本学生陸上競技個人選手権大会」、2008 年（H20）

１）文献：日本学生陸上競技連合（2008）会報第 118 号、12 頁　（要約）

日本学生陸上競技選手権大会（旧チャンピオンシップ）と日本学生陸上競技対校選手権大会（日本インカレ）の名称が似ているために紛らわしい。一般の方が日本インカレと区別がつかず、間違った捉え方をされる可能性もある。この競技会の名称は、個人を加えて**日本学生陸上競技個人選手権大会**となった。

２）文献：2008 日本学生陸上競技個人選手権大会、大会プログラム 2 頁（会長あいさつ）

「本年から日本学生陸上競技個人選手権大会と名称を改め、対校得点争いに重きのある日本インターカレッジとは異なり、**『個人と個人の勝負』**、**『個人の記録への挑戦』**を通じて陸上競技のおもしろさを内外に発信し、学生陸上競技界のさらなる向上と進展を目指しているとこであります。・・・。」

３）文献：日本学生陸上競技連合（2018）、日本学生陸上競技９０年史、138 頁

「昨年までの全日本学生チャンピオンシップから日本学生陸上競技個人選手権大会に**改名**した 2008 年。実施した男女 35 種目のうち 19 種目で大会新が誕生するハイレベルな大会になった。」

＜２＞海外からの参加国　　⇒　資料 4-6、（尚、参加国数は資料 4 を参照のこと）

資料 4-6：「2010 日本学生陸上競技個人選手権大会」、2010 年（H22）

１）文献：日本学生陸上競技連合（2018）、日本学生陸上競技９０年史、139 頁

「オープン参加した前々回に続いて２度目の参戦となった台湾選手団は今回から正式参加となり、男子円盤投で大会新記録の 58m10 を放った王耀輝（台北体育學院）が優勝の第１号に。」

＜３＞学生幹事（＋競技委員会等）が企画・実行した大会運営（個人選手権大会限定）
資料 4-7、資料 4-8、資料 4-9、資料 4-10、資料 4-11、資料 4-12

資料 4-7：「2013 日本学生陸上競技個人選手権大会」、2013 年（H25）

１）文献：日本学生陸上競技連合（2013）会報第 137 号、37 頁（学生幹事＋競技委員会）

「大会運営の準備状況については、日本学連の学生幹事（幹事長ら３名）と競技委員会が連携・協力して、大会実施要項に沿って競技運営のあり方を検討し、各種の業務を計画的に遂行してきました。・・・本稿では、とりわけ６つの視点（大会のコンセプト、ＥＰプラン、競技規則、練習、学生審判員の研修会、競技運営に関する調査研究）に絞って簡潔にお知らせします。・・・。」

「大会のコンセプト：学生幹事の要望から、大会のコンセプトは**『個人と個人の勝負』**と**『自己記録への挑戦』**です。これらのコンセプトが実現されるためには、**競技者が最大限の能力を発揮できる競技運営が重要**になります。」注）他の５つの内容については省略する。

１）　引用文献：日本学生陸上競技連合（2013）会報第 138 号、6 頁
「今大会では、**『見ている人に楽しんでもらう競技会』**ということを意識した大会運営を心がけました。各種目で**優勝した選手**には、日本学連の学生幹事による場内インタビューが行われ、会場の観客・選手が一体となって優勝者を祝福しました。競技運営の中でも、**観客に配慮したイベントプレゼンテーション**を心がけ、決勝種目前にアナウンスで有力選手を紹介、新記録の期待がかかる場面などではアナウンスを通じて場内の観客に注目を呼びかけました。大会最終日の男子棒高跳で山本聖途（中京大）が５m85 の日本新記録に挑戦した際には、会場全体が一体となるのが感じられ、かってない盛り上がりと興奮が会場を包みました。さらに、日本学連の Ｔｗｉｔｔｅｒアカウントでは、各種目の優勝者のインタビュー内容と写真を速報で掲載し、会場に来ていない観客・選手にも関心を持ってもらえるような工夫を行いました。」

資料 4-8：「2014 日本学生陸上競技個人選手権大会」、2014 年（H26）
１）文献：日本学生陸上競技連合（2014）会報第 141 号、6 頁
「昨年度に引き続き、各種目で優勝した選手に対して、日本学連の学生幹事による場内インタビューを行い、会場の観客・選手が一体となって優勝者を祝福した。さらに」そのインタビューの内容と写真を Twitter にアップし会場に来られない観客や選手に対して大会の様子を発信していくことで、本大会への関心を高めていく試みを行った。こうした試みが日本の学生陸上への関心の向上の一翼を狙えるようになることを願ってやまない。」
２）文献：日本学生陸上競技連合（2014）会報第 141 号、32 頁（競技委員会）
「選手紹介」「トラック競技とフィールド競技の兼合い」「ライブリザルト」「インタビュー」「大型スクリーンの使い方」などを検討し、**競技会の盛り上げ方**を工夫しています。」

資料 4-9：「2015 日本学生陸上競技個人選手権大会」、2015 年（H27）
１）文献：日本学生陸上競技連合（2015）会報第 144 号、7 頁
「この大会は観客の皆さまに楽しんでいただけるように学生役員による優勝者インタビューなどのイベントプレゼンテーションに力を入れている。競技場に来られない遠方の方でも競技の模様が気軽に見られるように動画配信サイト（ユーストリーム）で配信するなど更なる改良を図っている。」

資料 4-10：「2016 日本学生陸上競技個人選手権大会」、2016 年（H28）
１）引用文献：日本学生陸上競技連合（2016）会報第 147 号、7 頁
「運営面では、今年度も優勝者インタビューなどのイベントプレゼンテーションや、競技場にくることのできない方でも競技の模様が気軽に見られるように動画配信サイト・Ustream で配信するなど、**「魅せる陸上競技**」というコンセプトをもとに、より選手や観客に楽しんでいただけるような競技会づくりを行いました。」

資料 4-11：「2017 日本学生陸上競技個人選手権大会」、2017 年（H29）
１）引用文献：日本学生陸上競技連合（2017）会報第 150 号、5 頁
「今大会は、ユニバーシアードが 8 月の開催になったことで、最終選考競技会として実施することができました。そのため、記録の上で大変盛り上がる大会となりましたが、**観戦されるお客様を意識した運営や進行なども充実した大会**であったと思います。」

資料 4-12：「2018 日本学生陸上競技個人選手権大会」、2018 年（H30）
１）引用文献：日本学生陸上競技連合（2018）会報第 153 号、5 頁
「このようにチャイニーズタイペイの選手なども参加して**グローバルで、観戦されるお客様を意識した運営や進行なども充実した大会**であったと思います。」

以　上

資料６　参加標準記録２０１８―個人選手権大会と日本インカレ―

２０１８日本学生陸上競技個人選手権大会　標準記録

種　目	男　子	女　子
100m＊	10秒50	12秒10
200m＊	21秒40	25秒00
400m＊	47秒60	56秒40
800m	1分52秒5	2分13秒5
1500m	3分54秒0	4分32秒0
5000m	14分30秒0	6分30秒0
100mH＊	－	14秒30
110mH＊	14秒45	－
400mH＊	52秒00	1分01秒50
3000mSC	9分18秒0	11分00秒0
10000mW	10000mW　42分30秒0	51分00秒0
	10kmW　42分30秒	51分00秒
	20kmW　1時間27分00秒	1時間45分00秒
走高跳	2m13	1m72
棒高跳	5m10	3m60
走幅跳	7m60	5m90
三段跳	15m40	12m20
砲丸投	14m70	13m00
円盤投	46m00	43m00
ハンマー投	57m50	50m00
やり投	69m00	50m00

（注）「＊」を付した種目については、電気計時による記録のみ有効とする。

天皇賜盃第８７回日本学生陸上競技対校選手権大会　標準記録

注）種目は個人選手権に合わせた。

≪男子≫	標準記録Ａ	標準記録Ｂ	標準記録Ｃ	≪女子≫	標準記録Ａ	標準記録Ｂ	標準記録Ｃ
100m＊	10.45	10.56		100m＊	11.93	12.10	
200m＊	21.00	21.35		200m＊	24.55	24.85	
400m＊	47.00	47.20		400m＊	55.30	56.10	
800m	1.50.5	1.52.0		800m	2.11.0	2.13.0	
1500m	3.49.0	3.52.0	地区インカレ、北日本インカレ及び西日本インカレの優勝者	1500m	4.26.0	4.31.0	地区インカレ、北日本インカレ及び西日本インカレの優勝者
5000m	13.55.0	14.05.0		5000m	16.05.0	16.20.0	
110mH＊	14.05	14.35		100mH＊	13.90	14.25	
400mH＊	50.80	51.20		400mH＊	1.00.00	1.00.80	
3000mSC	8.55.0	9.01.0		3000mSC	10.30.0	10.55.0	
10000mW	42.00.0	10000mW 42.30.0		10000mW	49.30.0	10000mW 50.00.0	
		20kmW 1.27.00				20kmW 1.43.00	
走高跳	2.16	2.13		走高跳	1.75	1.72	
棒高跳	5.20	5.10		棒高跳	3.70	3.60	
走幅跳	7.70	7.60		走幅跳	6.00	5.95	
三段跳	15.70	15.60		三段跳	12.40	12.20	
砲丸投	15.70	15.00		砲丸投	13.90	13.30	
円盤投	48.00	47.00		円盤投	46.00	43.50	
ハンマー投	61.00	59.00		ハンマー投	53.00	49.50	
やり投	71.50	70.00		やり投	52.00	50.00	

①　「＊」を付した種目については、電気計時による記録のみ有効とする。

②　地区インカレ、北日本インカレ及び西日本インカレの優勝者の人数は問いません。（同点・同着の場合）

資料７　競技成績２０１８―個人選手権大会と日本インカレ―

はじめに：　①競技成績は、両大会の競技結果（公式発表資料）より、一部抜粋したものである。②競技成績は１位から３位まで記載した。③両大会の競技生成（記録）の比較をするために、日本インカレの種目は個人選手権の種目に合わせた。④個人選手権大会の記録に下線がある競技者は外国籍である。⑤凡例（NGR:大会新記録、=GR：大会タイ記録）

２０１８日本学生陸上競技個人選手権大会

≪男子≫	Ｉ位	２位	３位	≪女子≫	１位	２位	３位
100m	10.11/+0.2	10.45/+0.2	10.47/+0.2	100m	11.78/+1.1	11.81/+1.1	11.83/+1.1
200m	20.88/+2.0	20.93/+2.0	20.94/+2.0	200m	24.02/+1.8	24.23/+1.8	24.32/+1.8
400m	46.93	46.96	47.13	400m	55.01	55.35	55.41
800m	1:50.57	1:51.22	1:51.40	800m	2:11.98	2:12.31	2:12.35
1500m	3:52.23	3:52.25	3:52.54	1500m	4:25.52	4:25.65	4:25.84
5000m	13:45.65 NGR	13:47.32 NGR	13:54.18 NGR	5000m	15:46.84 NGR	15:49.37 NGR	15:52.82 NGR
110mH	13.61/+0.9	13.87/+0.9	13.91/+0.9	100mH	13.41/+2.5	13.41/+2.5	13.48/+2.5
400mH	50.52	50.91	51.16	400mH	59.79	59.94	1:00.17
3000mSC	8:52.28	8:55.92	8:58.12	3000mSC	10:04.88	10:17.71	10:23.96
10000mW	40:27.90 NGR	40:30.12 NGR	40:36.53	10000mW	46:53.98	46:56.09	47:28.64
走高跳	2m22　NGR	2m19	2m19	走高跳	1m75	1m72	1m72
棒高跳	5m40	5m20	5m20	棒高跳	4m02　NGR	3m85	3m70
走幅跳	7m76/+1.1	7m63/+2.1	7m62/+0.8	走幅跳	6m03/+0.4	5m91/+1.8	5m90/+0.4
三段跳	16m20/+4.0	15m85/+2.0	15m80/+2.1	三段跳	12m76/+0.8	12m73/+0.3	12m65/+2.5
砲丸投	16m50	16m43	16m03	砲丸投	15m71	15m28	15m06
円盤投	53m97	51m22	50m59	円盤投	51m03	48m71	48m02
ハンマー投	66m87	66m59	65m57	ハンマー投	58m33	58m05	57m82
やり投	75m39	70m17	70m10	やり投	56m86	54m25	53m02

天皇賜盃第８７回日本学生陸上競技対校選手権大会

≪男子≫	Ｉ位	２位	３位	≪女子≫	１位	２位	３位
100m	10.34/-1.4	10.35/-1.4	10.36/-1.4	100m	11.86/-2.1	11.88/-2.1	11.94/-2.1
200m	20.66/-4.	20.76/-4.0	21.11/-4.0	200m	24.19/-3.1	24.54/-3.1	24.71/-3.1
400m	45.75　=GR	45.79	45.96	400m	53.27	53.52	54.44
800m	1:54.10	1:54.23	1:54.36	800m	2:05.88	2:06.12	2:06.54
1500m	3:46.28	3:46.42	3:47.32	1500m	4:25.50	4:28.53	4:28.68
5000m	13:49.80	13:59.45	14:08.75	5000m	16:06.83	16:08.67	16:09.23
110mH	13.75/-1.1	13.87/-1.1	13.90/-1.1	100mH	13.53/-0.6	13.61/-0.6	13.67/-0.6
400mH	50.33	50.93	51.03	400mH	58.34	58.76	58.77
3000mSC	8:31.98 NGR	8:44.74	8:48.66	3000mSC	10:02.04	10:11.11	10:19.78
10000mW	40:35.34	40:42.50	40:56.34	10000mW	47:31.33	47:40.78	48:27.11
走高跳	2m18	2m15	2m15	走高跳	1m78	1m78	1m75
棒高跳	5m40	5m30	5m20	棒高跳	3m90	3m80	3m80
走幅跳	7m97/+1.3	7m84/+5.9	7m79/+2.5	走幅跳	6m06/-0.1	6m01/+0.9	6m00/+2.0
三段跳	16m53/+1.6	16m17/+1.7	16m02/+2.5	三段跳	13m12/+2.3	12m95/+0.8	12m76/+0.2
砲丸投	17m47	17m10	17m00	砲丸投	15m60	15m33	15m07
円盤投	52m10	51m98	51m53	円盤投	53m31	50m71	48m89
ハンマー投	66m38	66m10	63m34	ハンマー投	56m51	56m19	56m02
やり投	74m01	73m99	73m69	やり投	60m48	54m42	52m70

資料８　強化委員のアンケート結果（８名：まとめ）

＜はじめに＞　アンケートの対象、質問内容、調査目的、調査方法、結果の利用目的、調査期間、調査主体

このアンケートは、日本学連強化委員会委員を対象とし、「**日本学生陸競技個人選手権大会（以下、「個人選手権」と略す）**」に対する考え方などについてご回答いただくことを目的としております。皆様のご回答は第６４回指導者会議（日本学連主催、2019 年３月９日開催、テーマ：「**個人選手権のあり方を考える―検証と課題―**）の参考資料として活用させていただきます。尚、ご回答は匿名とし、上述の目的以外に利用することはありませんので、是非ともアンケートにご協力をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

注）ご回答は、2019 年１月１５日（火）までに強化委員長宛にメールでご返送くださるようお願いいたします。

公益社団法人日本学生陸上競技連合 指導者会議運営委員会　　2018 年 12 月 21 日（金）

付加事項：アンケートを依頼するにあたって

・お詫び：質問の内容が細かくて大変申し訳ありません。

・ご回答は可能な範囲で簡潔（or　箇条書き）にお答えください。お願い致します。

お詫び：問１－４）の質問：「個人選手権におけるＩＡＡＦランキング制度の導入について」は、解釈が２通りあり、回答者にご迷惑をお掛けしました。この場をお借りしてお詫びを申し上げます。回答のまとめ方としては、解釈の違いよりも、回答者ごとにまとめました。

※　各質問の回答を記入するにあたって：　回答欄が無記入の場合は省略しました。

１．　個人選手権に対する考え方などについてご意見などをお聞かせください。

１）日本インカレと比較して個人選手権だけがもつ魅力について

○地区インカレが終了し、学生が出場できる競技会が極端に減る時期に、他地区との選手と競技ができること。

○① 各種目、各大学から３名のエントリー数上限がある日本インカレと異なり、標準記録突破者が無条件で参加資格を有するため、所属地区学連や大学間の競争差m、が含まれない、ランキング通りの勝負が同一条件で

できるのは競技会の価値はある。

② ①につづき、１大学からのエントリー数に上限が無いため、種目によっては多数のエントリーが考えられる。現行の標準記録は、３日間の競技日程で開催できるような標準記録を設定していると考えられるが、競技全体の進行を早めることも考慮が必要。そこで、フィールド競技の試技数を予選２回、決勝３回などの工夫があっても良いのではないだろうか。

③ 今後、学連内（または陸連内）で強化種目を設定し、隔年、または記録水準の傾向を評価した上で、エントリー数上限を設定し、ある一定以上の競技レベルで競技を実施する。国体や日本グランプリ（旧サーキット）の様に実施、非実施年（グランプリ、ノングランプリ）を設定して開催する。

④ 出雲選抜駅伝にアイビーリーグ選抜を参加させているように、個人選手権に海外招待選手を参加させ、「world vs Japan」のような対抗（校）を実施するのは、いかがでしょうか。

○・各大学からの出場人数制限がない→標準記録さえ切っていれば出場できる。

・U20、９位以下決定戦などの細かい設定。

○種目特性を考えると各大学の参加人数制限を設けていないこと

○地方学連の学生にとっては、大切な重きのある競技会
○・対校競技と異なり、記録を狙える。
・競技者のレベルによるが、参加標準記録を目標にできる。
・ユニバーシアード派遣等の選考競技会としての参考競技会ともなる。
・一応、学生の全国大会と位置づけられ、大学より学生に補助金が出る。
○（本来は対校戦ではないので）所属・勝負にこだわらない、記録を狙うための思い切ったレース・試合ができる（はずである）。
○日本 IC のような 1 校あたりの人数制限がない。
対校戦特有の得点争いに伴う牽制や駆け引きが相対的に低く、その分個人のポテンシャルが発揮されやすい。
→　個人の最高能力が発揮されやすいエキサイトなレースになるはず

2）同一種目における決勝Ａと決勝Ｂ（9位以下決定戦）の設定について　（例えば意義、今後の方向性など）
（決勝Ｂ：女 100mH、 男 110mH、女 100m、女 200m、男 200m）

○現在の競技場では、当日の気象条件で走路の選択が可能なため、記録を狙うチャンスがもらえるためいい試みではないかと感じている。
○① A 決勝、B 決勝の実施は、競泳の様に細かな順位をつけることができるため、“ファイナリスト以外皆同じ順位”にならない貴重さと面白さがあるので、今後継続されるのを希望する。ただし、A 決勝の方が B 決勝よりも低記録になった時のメディアや観客の反応は気になるが、それは、A 決勝に進出した選手は B 決勝よりも劣ってはならない条件でもある。
②対校戦ではない為、対校得点化するために順位をつける必要性は無いのかもしれないが、出場選手に可能な限り全国大会規模のレースを経験させるためには、有益なシステムである。ただし、短期間でレース数を多く消化しなければならない、選手のコンディションと運営側の立場を考慮して、1 選手 1 種目のみのエントリーという規定づくりも考えられる。
○・選手のモチベーションアップにつながるため良いと思う
・あとは運営上問題が無いかどうか、どの種目に決勝Ｂを設けるか
○ラウンドを重ねて各種目のチャンピオンを決める学生選手権である中で、B 決勝の意義を感じません。
○・準決勝がない場合は、賛成。
・参加者の半数程度は次のラウンドに行けるようにするとよい　→　A・B 決勝など
・短距離系だけに限定するのは、不公平感がある。
○・参加料は、同じで少し疑問に感じる。
・開催場所の平塚競技場は追い風となり、好記録を期待すると実施の意味がある。
（学生の競技力向上から考えると良いのではないか）
○800m以下のトラック種目で、参加人数とその競技レベル、加えてタイムスケジュールに余裕があればＢ決勝導入は面白い（大会自体の魅力の向上・競技力向上につながる）と考えます。
○機会を与えること自体は、選手強化にとっても有益であるが、欠場する選手も見受けられる等、選手自身にその認識が希薄な部分がみられる

3）海外の学生アスリート（チャイニーズタイペイなど）との競争（競走）について（例えば、意義、今後の方向性など）

○いいことである。但し、優勝者が海外アスリートの場合、当然のこと、日本選手の順位が一つ下がる。大学などでは、この大会も評価しているところも多く、その面では学生にはマイナスになることもある。きていただいた選手の国に、レースを行いにいくなども考えてもいいかと考える。
○個人選手権は、旧種目別選手権にはじまり、様々な開催目的を経て現行に辿り着いていると思います。海外選手が参加できるようになると、今後、ユニバーシアードやアジア大会などに向けて、日本近隣の国や地域の競技レベルや強化の動向を把握する上では、面白い試みかと思います。将来的に日本学連からチャイニーズタイペイへの遠征や競技会参加などを計画するきっかけづくりにもなるかもしれません。日本学連専用のトレセンとしてチャイニーズタイペイを位置づけることもできるのではないでしょうか。ただし、海外の選手が参加するために国内の学生が参加できない（レーンが無くなるような）ことが起きない為に、招待レースなど特別化する必要はあるかもしれません。
○非常に良いことだと思う。今後も継続してほしい。
○海外に門戸を開くのは、賛成
○あくまでもオープン参加であり、順位外とすべきである。
○学生アスリートに海外に目を向けてもらう（世界・アジアのレベルを知る）ことの必要性を含め、アジア諸国で日本の学生アスリートと同等もしくは若干高いレベルの選手と協議することは意義があると考えます。
○友好国の選手を招待して、競技力を競うこと自体は意義のあることだと思われる。できれば競技以外のところで、国際交流が促進されることが望まれる。

4）個人選手権における<u>ＩＡＡＦランキング制度の導入について</u>　（例えば、意義や今後の方向性など）

○どれだけの選手が対象になるかわからないが、導入には問題なしかと思う。但し、有望な選手がエントリーして、記録が出たラウンドのみや欠場したときの大会としての意義が失われないか。現在、開催している競技場は、直線種目など記録が誕生しやすいという評判ができつつあるため、実業団など他連盟等の出場希望が出てくると思われるという問題などがあるかとも考える。
○IAAF ランキング制度をどのように運用するかによるので、賛成か反対かのどちらかを回答するのは控える。ランキングの順でエントリーが認められるようなシステムなのでしょうか。または、個人選手権がランキングポイントに反映するような競技規模になるよう運用するのであれば、大会レベルの質的補償は必須である。そのためにも競技会場の規模や標準記録を上げてエントリー選手のレベルが上がるような結果を目的に準備する必要がある。
○学生選手権における IAAF ランキング制度を導入する場合は、大会のカテゴリーが大切になるが、そのカテゴリーをどのように高めるかが今後の課題となりそうである。
○参加標準記録のみで充分。
○・個人選手権大会じたいの大会ランキングの位置づけの明確化。（評価の高い競技会なのかの明確化）
・参加選手をランキング順位のみで選ぶのは、賛成できない。
（まずランキング対象とした大会を決めるべきだ）
・参加選手はランキング及び参加標準記録でも認めるべきである。
○（理解不足で申し訳ありませんが）個人選手権の参加資格にＩＡＡＦランクングを導入するのか、大会自体をＩＡＡＦランキング対象試合にするのか、どちらでしょうか。前者であれば、まずは国内（学生）ランキングを導入してはと考えます。⇒ 参加者のレベル向上につながる？
○競技力向上のための布石となる可能性があり、導入には賛成したい。

５）**個人選手権の開催時期について　　（注：６月開催か、それ以外か）**

○現時点では、開催できることに感謝しつつ、日本選手権や教育実習などとの兼ね合いも考える時期かもしれない。

○これまでユニバーシアードの選考競技会として、他地区の選手が同一条件で競い合う機会にもなっており、選考基準となる有益な競技会として扱われていたと考えています。今後、選手選考会としての意義を含むような大会にするのであれば、現行の 6 月開催、または翌年の春季に開催される世界大会（2019 年であればアジア選手権など）の選考になるような 10 月開催を希望する。

○・６月開催はあまりよくないと思う

→６月は日本選手権や、西日本インカレ、北日本インカレなどハイレベルな大会が続くため、選手としても調整が難しいのでは。九州の場合は、６月に全日本駅伝予選会がある。

・しかし、４・５月は地区インカレ、７・８月は暑さの心配、９月は日本インカレなどあるため、仕方が無い部分もある。

○年間の競技日程との連動性が重要となってきますので、本大会だけ単独の移動ではなく、日本陸連、実業団とも協議しながら検討していかなければならないと思います。個人的には、現状の 6 月開催がよろしいかと思います。

○・6 月開催が望ましい

・日本選手権混成と重なるが、1 週目（日本選手権と開ける）

○今までの時期でよいと思う。また、もともと長距離選手の参加も少ないので秋開催も検討しても良いのでは。

○現在の年間競技カレンダーでは、上位大会への代表選考試合になること、ほぼ全種目の試合コンディションを考慮すると 6 月開催がベターだと考えます。（地区インカレ・日本インカレ、気候を考慮）

○過密スケジュールの状態であるが、後期だと駅伝シーズンによる影響がでるので、やはり 6 月、7 月あたりが妥当であると考える。

２．今後の個人選手権に向けてのご意見やご要望などがありましたら、ご自由にお書きください。

○記録が公認記録として認められる条件さえ揃うのであれば、商標登録や映像権利の規定を適用しない競技会になれば、興行的な効果も期待できるのではないかと思います。また、開催地を長年固定化しているトラック＆フィールドの競技会は、個人選手権だけです。スケジュールが計画しやすい、大会運営、開催地への経済効果などを考慮すると引き続き平塚開催、または開催地が変更したら、5 年はその地域で継続開催できるのが望ましい。

○トップ選手の強化試合、トップエンドの育成強化の競技会と位置づけ今後も実施して頂ければと存じます。

○地方学連の学生にとっては、重要な競技会である。全国規模の競技会に相応しい競技場での実施を臨む（開催の困難さの諸事情は充分理解しているが）。競技会を開催するにあたって、やはり、きちんとしたサブ競技場は必要であろう。そのために参加者が少ないのではないか？

○もう少し競技レベルを上げて、大会の重要度を高めてはと考えます。また、地方学連からの参加者数に影響（減？）するかもしれませんが、各種目、特に男女 5000mの参加基準を上げてはどうでしょうか。

○対校戦にみられる利害に影響されることなく、まさに学生のトップを選考する全国大会であるが、ユニバ選考レースにならない場合に、今一つ盛り上がりに欠けるところが時々みられる。毎回、何か特別なインセンティブ(ex. 新記録が出たら賞金、海外派遣・・・)が必要かも？

以　上

資料９　個人選手権優勝者のアンケート結果（28 名：まとめ）

＜はじめに＞　アンケートの対象、質問内容、調査目的、調査方法、結果の利用目的、調査期間、調査主体

このアンケートは、「**2018 日本学生陸上競技個人選手権大会（以下、「個人選手権」と略す）」の優勝者（男女合計 39 種目）の皆様**を対象とし、各選手の個人選手権に対する考え方などについてご回答いただくことを目的としております。皆様のご回答は第６４回指導者会議（日本学連主催、2019 年３月９日開催、テーマ：「**個人選手権のあり方を考える―検証と課題―**）の参考資料として活用させていただきます。尚、ご回答は匿名とし、上述の目的以外に利用することはありませんので、是非ともアンケートにご協力をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

注）ご回答は、2019 年１月 10 日（木）までにメールで日本学連事務局宛にご返送くださるようお願いします。

公益社団法人日本学生陸上競技連合 指導者会議運営委員会　　2018 年 12 月 12 日（水）

付加事項：アンケートを依頼するにあたって

・ご回答は簡潔（or　箇条書き）に記載してください。

お詫び：問１－４）の質問：「個人選手権におけるＩＡＡＦランキング制度の導入について」は、解釈が２通りあり、回答者にご迷惑をお掛けしました。この場をお借りしてお詫びを申し上げます。回答のまとめ方として xc は、解釈の違いよりも、回答者ごとにまとめました。

※　各質問の回答を記入するにあたって：　回答欄が無記入の場合は省略しました。

１．あなたが出場された個人選手権に対する考え方や感想などについてお答えください。

１）**あなたにとって個人選手権はどのような舞台でしたか。**

01 インカレと比べ、日本一が狙いやすい大会であり、その後の大会の自信をつけるいい機会になった。

02 全国の選手と走ることができる数少ない機会の１つで、自分自身の実力がどこまで通用するかということを確認することができる試合でした。その中で、新記録で優勝することができたのは、これからの陸上人生にとって大きな自信につながりました。自分の走りを全国にアピールできた舞台だと思います。

03 全国大会の一つ

04 今年に関して言えば、日本選手権の１週間前に行われる大会であるため、位置付けとしては日本選手権の予行練習だった。

05 全国規模の大きな大会で、今年は優勝を目指していた。

06 優勝するつもりで望んだ。（過去にも勝ったことがある試合だったので）

07 楽しめる舞台

08 日本選手権に出場できなかったのでその悔しさを示す舞台

09 他大学と競い合える全国大会のような舞台だと思っています。

10 数少ない学生のトップを決める大会で全国からトップ選手が集う舞台であったのでなんとしても自分が優勝したいと思えた大会でした。

11 大学に入って初めての全国規模の大会で自分自身より記録が速い人と戦えるということで緊張よりも楽しく走れた舞台だった。

12 U20 世界選手権の選考があったため、記録を出さなければいけない舞台でした。

13 全日本インカレの次に大きい全国大会のイメージ。仕組みもそこまでわからないまま跳んだ。とにかく記録更新を狙った大会であった。

14 世界ジュニアの選考会であり、重要な試合だった。

15 全国の舞台であるから記録や順位は狙うが、翌週に控える日本選手権で最高のパフォーマンスを発揮したいの

で個人選手権はその調整になれば良いと考えている。
16 わたしにとって個人選手権は、しっかり自分のレースができて優勝できたこともあり、シーズンの流れをつくる大事な試合となりました。目指してきた優勝という場所にやっとこの日にたどり着けて、これからのスタートの第一歩となる舞台となりました。
17 各大学の実力ある選手が集まる日本インカレ前のプレ日本インカレのような舞台で、ライバルの調子や現時点での自分の実力が試せる舞台だと考えます。
18 自信をつけることができ、成長出来た舞台でした。
19 全国大会
20 目標としていた舞台のひとつ。
21 強い選手が出ない為、全国タイトルが取りやすい大会
22 初めて全国の舞台で優勝できた、自信になる試合
23 日本選手権への最終調整。
24 大学生になって唯一の全国優勝。自己ベスト更新だったので記憶に残る試合だった。
25 今年、来年の全カレへの通過点として考えていたので、技術的な内容にこだわった試合であった。
26 優勝できて嬉しかったが、記録的にはとても悔しさが残る大会だった。
27 学生タイトルのうちの一つの大切な試合
28大きな自信に繋がった試合だと思います。全国のタイトルを取れたことは自信に繋がりましたし、これからの意欲向上になりました。

2）あなたにとって<u>個人選手権だけがもつ魅力とは何</u>ですか。

01 対校戦ではないので、プレッシャーも少なく走れる。
02 インカレや駅伝のような学校対抗ではなく、本当に個人個人の実力の競い合いなので、同じ学校という枠を超えてそれぞれが優勝を目指して走るというところだと思います。
03 学校対抗では同一種目で３名までしか出場できないが、標準記録を切れば何名でも出場できるところ。
04 全カレと違って、参加標準記録さえ突破していれば同じ大学から何名でも出場できるので、日頃一緒に練習している仲間と一緒に参加できること。
05 タイムを切れば何人でも出場できる全国大会
06 学生レベルの試合で海外のトップ選手と試合出来るのは個人選手権だけなので刺激になる。学校対抗じゃないので個人の力がためされるのが良い.
07 標準を切れば誰でも出場できる。
08 リレーがないので実力がためされるところ
09 私の種目にはいませんでしたが、他の種目で、海外の選手も出場していたこと。
10 インカレのような対校戦ではなく標準記録の日本インカレよりも高い種目が多いので、純粋に個人と個人との勝負になる点ではすごく魅力的な大会だと思います。
11 リレー種目がなく、大学の仲間もライバルになるのでいい意味で刺激を味わえることが魅力。
12 静かな中、競技に集中できるところです。
13 特に長距離は組分けされている中で、本当に自分の力を出しに行ける大会であり、「優勝」というよりは「記録」を狙いに行ける大会であること。
14 同じ大学からの出場人数が制限なく、一定の実力のある選手すべてが出場可能なところ。
15 学生の日本一
16 標準記録が比較的に他の全国の試合より少し低めなこともあって、いろんな人が出やすい大会になっていると思いました。
17 日本インカレや対抗戦などとはまた違った個人選手権ならではの独特な雰囲気が魅力的だと考えます。
18 チームの事を考えず、自分の事だけに集中して考えて走れる場所であるところが魅力だと思います。
19 学校対抗ではなく個人戦であること。個人の能力やメンタルの強さを試すことができること。

20 学校としてではなく、個人として戦えること
21 学校での戦いではないので、ある意味自分の試合に集中できる。
22 同一校から何人でも出場できる事。
23 海外の学生アスリートと競技ができる。
24 記録を越えていれば学校から何人も出れる。
25 団体種目がない分、１人ひとりが本来の力で勝負することができること。
26 点がかかっておらず、学生の中でのタイトルがとれるところ。
27学校対抗ではないところ。

３）あなたの個人選手権の競技目標はどの程度達成されましたか。（例えば、順位や記録など）

01 優勝できたことは良かったが、ベストがでなかったことは残念。
02 目標はあまり立てていなく、自分の実力の確認を心においていました。新記録で優勝、そして自己ベストの更新もすることができたのは大きな収穫でした。
03 優勝することはできたが、記録が納得いかない結果に終わってしまった。
04 記録についての目標はあまり達成できなかった。
05 優勝はできたが、記録が良くなかった。
06 記録は○○という大台にのったものの世界選手権は後 15cm、中途半端なので日本記録をめざす。
07 大会記録更新が残っている。
08 優勝でタイムは○○を目指していたので、６０％くらい。
09 優勝という目標は達成できましたが、タイムは目標に届きませんでした。
10 前回大会で○○秒差の○○位だったので、まずは優勝を目標に臨みました。結果として優勝に加え、大学の先輩である○○さんの大会記録を更新できたので非常に満足のいく結果となりました。
11 順位よりも記録を狙っていきました。最終目標である優勝もすることができた。
12９０％程度
13 目標は入賞であったが、優勝し、目標記録も上回ったので、良く達成出来たと思う。
14 記録の達成はできなかったが、順位の達成はできた。
15 雨という悪いコンディションの中で自己ベストを更新できたので、ほとんど達成された。
16 達成されました。
17 自己ベストで優勝することを目標としていたので、目標通り達成することが出来ました。
18 記録・順位ともに目標達成できました。
19○○連覇したので良かったと思います。
20 優勝だけを目標として臨み、目標通り優勝することが出来た。タイムは考えなかった。
21 通過点だったので、目標は怪我をしないことだった
22○○は優勝できなく悔しい。○△は優勝できて自己ベストも更新できたので目標は達成できた。
23 優勝を目標としていた為、100%達成できた。
24 順位に関しては予想以上、記録に関してはもう少しいけたと思う。
25 目標が○○、３位以内入賞だったので、順位に関しては目標達成できた。全国大会でベストが出たので、目標達成はできなかったが良かった。
26 優勝することは達成できたが、記録は自分の納得のいくものではなかった。
2780%。１位ではあったが記録が良くなかったから
28優勝は狙っていましたが、ランキング以上を目標にしていました。ランキング通りに優勝ができたのと、セカンドベストを投げれたことはとてもよかったと思います。

注）具体的な数字（時間、長さ、高さなど）は、○○等で示しました。

4）3）に関連して、あなたの次の競技目標は何ですか？　（例えば、国内大会／国際大会、記録など）

01 日本選手権での入賞、〇〇秒台
02 実業団の選手も参加する日本選手権への出場し優勝すること。そして、国際大会に出場することです。
03 日本選手権優勝、ユニバーシアードでメダルをとる
04 日本学生記録の更新
05 ユニバーシアード出場
06 一番近い目標はユニバーシアード大会　〇〇を跳んで優勝したい。
07 世界陸上、オリンピック
08 日本選手権上位。〇〇
09 国際大会に出場して戦っていきたいです。
10 来年度以降、実業団選手として競技を続けさせて頂くので、将来のオリンピック出場に向けてまずは2月に行われる日本選手権〇〇大会で入賞争いをすることが一番の目標です。
11 日本選手権をひかえているためその大会で上位入賞を狙っていきたい。
12 ユニバーシアード出場
13〇〇種目等に挑戦し上位に入ること。ユニバーシアードに出てメダルを獲得すること。日本選手権は入賞するくらいの気持ちでいく。自己ベスト更新。
14 ユニバーシアード入賞
15 ユニバーシアード。〇〇。
16 国体大会で入賞、優勝。国際大会でたたかえる力。
17２月には日本選手権があるので、この冬しっかり練習を積み、学生最後に結果を残せるよう努力していきたいです。
18 特にありません。
19 世界大会
20 日本選手権に出場、入賞すること。
21 自分を越えること
22 関東インカレ、全日本インカレ、個人種目、女子総合ともに優勝。ユニバーシアードの選手になり、国際大会でも優勝。日本選手権　100m、200m　三位以内。
23 引退しました。
24〇〇を投げる。
25 全カレ優勝。〇〇を跳ぶ。
26 国内大会での優勝、自己記録大幅更新
27〇〇、世界陸上、ユニバーシアード。
28まずは〇〇を投げることです。日本選手権でも上位入賞を目指したい
注）具体的な数字（時間、長さ、高さなど）や名称等は、〇〇で示しました。

5）同一種目における決勝Ａと決勝Ｂ（９位以下決定戦）についてご意見などをお聞かせください。
（決勝Ｂ：女 100mH、 男 110mH、女 100m、女 200m、男 200m）

01 タイムテーブル上、B 決勝を行うのは、選手の負担になる。
02 決勝の舞台を多くの選手が経験できることは良いことだと思う
03 予選準決勝があるので、B 決勝の必要性をあまり感じない。
04 専門が走幅跳なので良くわからないが、フィールド種目にもあったら楽しそう。
05 標準記録を狙えるチャンスだと思うので良いと思います。
06 選手にとっては予選から決勝までのラウンド数が減るため、負担は大きく軽減されると思うので、特に短期間で多くの種目に出場する高校生や大学生にとっては効果的な制度だと思います。
07Ａ決勝に行けなくてもＢ決勝で１番を狙い、記録の更新をすることでライバル同士が刺激を受け陸上選手全

体の競技能力の向上ができると思います。
08 必要ないと思います。
09 準決勝で負けた選手たちに更に「順位付け」をさせるのは、チャンスとも捉えられるし、逆に「いやみ」にも感じてしまう。
10 個人選手権を目標にしている選手にとって、B 決勝があることはとても良い機会だと思う。
11 決勝 B があることによって、もし落ちてしまっても普段より多く本数を走れるので記録を狙いたい人や納得のいかなかった人にとっていいと思う。
12 個人選手権ならではだと思います。
13 走る機会が増えるのは嬉しい。B 決勝でも優勝したり、A 決勝の人より速く走れたら次の試合への自信になる。
14 必要無いと思う。
15 投てき種目に関しては試合時間が長くなるため必要ないと思う。
16 決勝 B を行う必要はあるのか疑問に思う。
17 二試合行われるため、見ていて面白いと思う。
18無意味ではないが、決勝を分けることは不必要だと考えます。選手は決勝を目指してそれまでに練習を積んでいると思うので、1つだけでいいと思います。

6）海外の学生アスリート（チャイニーズタイペイ、香港など）との競争（競走）はいかがでしたか。

・体験された方：９名

１）意義はありましたか：

①はい：５名、　②いいえ：３名、　③わからない：0 名、④無回答：１名

２）今後の個人選手権でも競争したいですか。

①はい：５名、　②いいえ：１名、　③わからない：１名、④無回答：２名

＜付記:補足回答＞海外選手との競争はモチベーションもあがるし海外選手のレベルを知ることもでき、いいことだと思う。しかし、海外選手にとっては表彰台に登れることは必要だが、日本人選手にとって敵わないと分かってる相手がいたとしたら、表彰台を目指せる可能性がある選手が少なくなってしまう可能性もあり、オープンならいいのかなと思ったりもします。

・体験できなかった方：１８名

１）今後の個人選手権では競争したいですか。

①はい：12 名、②いいえ：２名、③わからない：３名、④無回答：１名

＜付記：補足回答＞体験はしていませんが、海外選手と競えることは学べることも多く、今後の競技生活にも繋がると思うので貴重な体験だと思います。

・無回答：1 名

7）個人選手権における<u>ＩＡＡＦランキング制度の導入について</u>ご意見などをお聞かせください。

01 世界的にも導入されることもあるため、個人選手権でも取り入れるべき。
02IAAF ランキング制度をよく理解していないので、導入してもいいと思います。
03 どちらでも良いと思う
04 この制度については、まだ理解していない学生がほとんどだと感じる。
05 シニア選手は良いがやはり学生に不利。遠征費、時間が限られる。
06 ありだと思います。大学生から盛り上げていきたいからです。
07 全体的なレベルは上がりますが、その分厳しいものになるなと感じました。
08 標準記録突破による大会参加だけでなく、IAAF ランキング制度の導入により、一層ハイレベルな大会になると思いますし、結果的に学生陸上界の発展に大きくつながる制度だと思います。

09 ランキング制度については多くのアスリート同士がランキングを見て意識の向上につながり競技についても記録なども上がってくると思う
10 目標を定めるためには良いと考えます。
11 個人選手権のランクから個人選手権が IAAF ランキングを狙いにいくための重要な試合になるとは思わない。
12 日本選手権を最重視するとなると、あまり必要ではないかと思う。
13 分からないです。
14 導入して頂きたいです。
15 導入しているとは知りませんでした。
16 定められた大会で安定して高い競技成績を修めることは、競技者として必須の能力だと思うので、ランキング導入は良いと思う。しかし、金銭的な問題等で海外のレースに出られない選手は、国内のレースでは海外レースと比べポイントが低いので不利になるのでは、と思う。
17 自分がどこのレベルにいるのか、わかりやすくていいと思う
18 緊張するがモチベーションが上がるのでいいと思う。
19 良いことだと思う。
20 世界大会を意識するためにも導入してみるのは良いことだと思う。
21 カテドリーが上がるとありがたい。
22 自分の今の力が世界のどのくらいの位置にあるのか明確にすることで、今後の練習意欲や記録更新に繋がっていくと思う。
23 ランキング制度が導入されるにあたり、出る試合を見定めていかなければいけないと感じる。
24 国際大会に出場できる機会が増えるのはとてもいいと思う。

２．今後の個人選手権に向けてのご意見やご要望がありましたら、ご自由にお書きください。

01 国内で海外の同世代のアスリートと戦う機会は無いので、個人選手権は是非、同世代の海外のアスリートを招待してほしい。
02 毎年楽しみにしている大会でもあるので継続してほしい。
03 表彰式での優勝インタビューは選手だけでなく、観客にとっても非常に面白いと思います。来年度以降も継続して行ってほしいと思います。
04 日本選手権と時期が近いので別の時期に開催してほしい。
05 人選手権は大会名を訳すと日本選手権の学生バージョンであり、全国大会なのにも関わらずあまり知名度がない。もっとアピールなどすべき。競技場や環境もいい時があり記録も出やすい試合となっているが、全く知られていなくてもったいない。最近はツイッターなども活動して前よりは知ってくれる人も増え改善してくれているなと思いました。個人選手権のおかげで全国入賞できる可能性が増える人もいると思う。大切な試合だが全カレだけが大学の試合ではないということをみんなに知ってほしい。
06 サブトラックがある競技場を使用した方が良いと思った。
07 ハンマー投げも競技場でできたらいいと考えます。表彰式が少し寂しかったと思います。
08 ハードルの練習時間が欲しいです。

以　上

資料１０　平成 30 年度 第６４回指導者会議開催要項

個人選手権大会のあり方を考える―検証と課題―

日本学生陸上競技連合では、日本陸上競技界の発展のため、毎年「指導者会議」の名の下、シンポジウムや講演等を通じて競技者の強化に関するさまざまな課題について考えてきました。

過去４回の指導者会議のパネルディスカッション・討論のテーマは次の通りでした。１）第60回指導者会議（日本学生陸上フォーラム2015）：「2020年東京五輪に向けた日本学連の強化策を考える―いま、何が課題か　夢を語る　未来を語る―」。２）第61回指導者会議（日本学生陸上フォーラム2016）：日本実業団陸上競技連合と日本学連の相互協力をキーワードとして学生アスリートの就職支援や就職後の練習環境支援に関するテーマ。３）第62回指導者会議（日本学生陸上フォーラム2017）：リオ代表（オリンピアン／パラリンピアン）の現役学生アスリートとベテラン社会人アスリートをパネリストとして迎え、「大きな舞台に出場して見えてきたもの」「学生時代にやっておくべきことは何か」のテーマ。４）第63回指導者会議（平成２９年度ユニバーシアード強化研究会）：「ユニバーシアード競技大会台北2017の検証と今後の課題」。

今回の第64回指導者会議は、上記会議の成果等も参考としながら、日本学連が主催する個人選手権大会に焦点を置きます。会議の目的は、今後の個人選手権大会のあり方を考えるために、中長期的な視点に立ったアジアパーミット大会の開催も視野に入れながら、現状の検証を行って今後の課題を明らかにすることにあります。各演者には検証の視点（注１）と資料（注２）を参考にして発言してもらいます。また進行についてはフロア（指導者や学生幹事ら）も含めて活発な意見交換の場になるように努めます。

注１）検証の視点：個人選手権の特徴、個人選手権の競技運営2018

注２）参考資料：個人選手権の歩み、日本ＩＣと個人選手権の関係、ＩＡＡＦランキング制度、アジアパーミット大会

記

１．主　催　公益社団法人日本学生陸上競技連合

２．日　時　2019 年（平成 31 年）3 月 9 日（土）（理事会終了後）：
受付 15:00～15:30、 会議 15：30～17:00（90 分）

３．会　場　中央大学駿河台記念館　６７０号

４．対　象　日本学生陸上競技連合関係者(地区学連、加盟校等)、陸上競技愛好者（大学等）

５．定　員　120 名

６．司 会　障子 恵 氏（跡見学園女子大学、学生連合：理事・総務委員長・指導者会議運営委員）

７．コーディネーター　船原 勝英 氏（共同通信社、学生連合：指導者会議運営委員）

８．演者　(順不同)
宮崎芽衣 氏（日本女子体育大学、学生幹事長）
二見百香 氏（日本体育大学、学生副幹事長）
栗山佳也 氏（大阪体育大学、学生連合：常務理事・強化委員長）
関根春幸 氏（東京都立世田谷総合高等学校、学生連合：常務理事・競技委員長）

以　上

資料１１　平成３０年度指導者会議運営委員会

指導者会議運営委員会委員長		阿保 雅行
	委員	石井 朗生
	委員	障子　　恵
	委員	永井 立子
	委員	船原 勝英
オブザーバー	学生前幹事長	蔵並　　香
	学生幹事長	宮崎 芽衣
	学生副幹事長	二見 百香
	学生常任幹事	黒井 文香
	学生常任幹事	古屋敷律希
	事務局長	大西 清司

注）指導者会議運営委員会；平成28年度 新規設立

資料１２　平成３０年度指導者会議運営委員会の開催報告

（平成30年4月～平成31年3月末）

月　日	委員会（報告内容）	場　所
（平成30年）		
4月24日（火）	第１回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
5月30日（水）	第２回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
6月26日（火）	第３回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
7月17日（火）	第４回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
10月18日（木）	第５回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
11月19日（月）	第６回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
（平成31年）		
1月18日（金）	第７回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
2月25日（月）	第８回指導者会議運営委員会	日本学連事務所

資料１３　演者らの委員会等での意見・助言など

平成30年 7月17日（火）上記第４回委員会（神尾副会長、関根競技委員長）
平成30年10月18日（木）上記第５回委員会（神尾副会長、関根競技委員長）
平成30年11月19日（月）上記第６回委員会（関根競技委員長）
平成31年 2月15日（金）会合（午後１時～３時、学連事務所）（栗山委員長）

平成３０年度 第６４回指導者会議 報告書

発行日　2019 年（平成 31 年）３月３１日
発行人　松本正之
編集人　永井　純
発行所　公益社団法人日本陸上競技連合
〒151-0053
東京都渋谷区代々木１－５８－１１　中沢ビル
電話　０３－５３０４－５５４２